方向

三

目次

筆補造化天無功 （一）
―李長吉をめぐって―
死角の眼 （五一）
昌谷詩 （七九）
雙岡隨想 （九三）
―徒然草をmotiveとして―

筆補造化天無功

—李長吉をめぐって—

原田憲雄

筆補造化天無功

原子爆弾を投げてみて、投げられた方はいうまでもない、投げた方も、その結果にガクゼンとした。そうして、科學が人間をはるかに追いこしてしまったと嘆いている。果して科學が人間を追いこしたのか。そうではあるまい。科學ということばにおきかえられた破壊の觀念が人間のモラルに打ち克ったのだとすべきであろう。原子爆弾がもたらした破壊の事實はじつに重く暗く、これを知る者には再度の投下などは考えるだも能わぬものだが、破壊の觀念は原子爆弾以上の破壊力を求める方向につき進んでいるようだ。

中夏の人々にながく君臨した天も、これが觀念化されたはじめには、

原子爆弾以上の恐怖をもたらしたに違いない。さればこそ天の観念を背負って立った古代の知識人が今日の世界におけるアメリカに匹敵するような権力をつかみえたのであろう。

観念というものは事物もしくは事實から生れるものではあるが、いったん生れ出ると事物もしくは事實よりもすみやかに生長し、逆にこれらを支配しはじめる。観念が事物もしくは事實と違うところは、事物もしくは事實から何物かを切りすて、つけ加えることによって成立することだ。事物もしくは事實は、大であれ小であれ、そのものとしてはすべてであって、余すところも不足するところもない。これに對して、観念は條件によっては大きくもなり小さくもなり全く別のものともなることができる。観念のこの融通性が事物もしくは事實を支配する力ともなるのだが、切りすてられた事物もしくは事實はやはりそのまま存續し、やがてこれが観念に復讐する。

古代ケルト族の信仰によれば、死者の魂は動物や植物や無生物の中にさまよい入って、そこに閉じこめられている。ところがある日われわれは偶然に、これらの魂の牢獄となっている事物を入手したり、樹木をみつけたりする。すると中から聲をふるわして叫ぶものがある。もしわれわれがこの聲を理解すれば呪縛は破れてしまう。魂はわれわれによって解放され、死を克服して、ここにまたわれわれと共に生き續けるという。（ポルクルテイウス「現代ヨーロッパにおけるフランス精神」）

世界が原爆の恐怖の下におかれた今日の事態は、われわれの生を死者の魂と化する。この呪縛を破ることは全く偶然にゆだねられているとしか思えないほど絶望的ではあるが、しかもなお敢てモラルを回復しようとするならば、道はただ一つ、事物もしくは事實の中にとじこめられた聲を聞きこれを理解すべく努めるほかにはないであろう。

中國の人たちにおける天も、それが觀念の呪縛となるときこれに矛を

向ける事實があらわれるであろう。われわれは新中國の人々に死から甦った魂を見ないであろうか。

さて、長吉に還ろう。一詩がある。題して「高軒過」（貴人のおいで）

といゝ彼の作中では最も名高いものである。有名といってもおのずから限りがある。さきに私は「唐ひとの詩文を收めた集で見うるかぎりのものは當ったが李賀の名すら見出しえなかった」と記した。中學生であった私の見聞が極めて狹少であったというにすぎない。とはいえ、唐詩への入門書として日本で流布すること最も廣かった『唐詩選』『三體詩』に長吉の作品が一首も見えないのは事實である。兩書は俗書といわれ『唐詩選』の如きは舶載せられた當初からその杜撰をそしるものが少くなかった。だが、樂府や中晩唐詩のみを選んだ特殊なものをしばらくおけば、レッキとしたアンソロジイにあっても、長吉詩を採るものの少く、採った場合も十首をこえることのまずないという点では、俗書とその事情を

異にするものではないらしい。かく採られることの稀な中に、選んで必ず洩らさぬ一首、それが「高軒過」である。

華裾織翠青如葱
金環壓轡搖玲瓏
馬蹄隱耳聲隆隆
入門下馬氣如虹
云是東京才士文章鉅公
二十八宿羅心胸
元精耿耿貫當中
殿前作賦聲摩空
筆補造化天無功
龐眉書客感秋蓬

華の裾は翠を織って葱の如く
金の環は轡と壓なり搖らいで玲瓏
馬の蹄は耳に隱ろきて聲隆隆
門に入り馬より下りて氣は虹の如し
云は是れ東京の才士、文章の鉅公
二十八宿は心胸に羅なり
元精は耿耿として當中を貫く
殿前に賦を作れば聲は空に摩き
筆は造化を補って天に功無し
龐眉の書客の感すること秋の蓬のごときに

誰知死草生華風　　誰か知らん死草の華やげる風に生えるを
我今垂翅附冥鴻　　我れ今まさを垂れて冥鴻に附かえども
他日不羞蛇作龍　　他日は羞じざらん蛇の龍となるに

（高軒過・皿・194）

アンソロジイの編纂が批評家の鑑識に出でるものである以上、人によって取捨の異るのは當然である。しかも、いずれの集もこれを洩らさぬといえば、相應の理由がなければなるまい。

この詩には「韓員外愈、皇甫侍御湜、過らる。因って命せられて作る」とのことばがきがついている。員外・侍御はそれぞれ韓愈・皇甫湜の職名である。首句まず眼に飛び込んで來た來訪者の衣裳の鮮かな色彩をとり上げ、ついで馬首の金環をのべ、時間の推移につれ視覺は聽覺にうつり、涼しい響の音　とゞろく馬蹄、と思う間もなく、門に入り、馬より下りる人の姿が、まざまざと寫され、詩々華麗を極めながらしかも自然

である。「云是東京才士文章鉅公」思い切って長く言い放ったところが、いかにも堂々として、次の「二十八宿羅心胸、元精耿耿貫當中」の大げさな表現を無理のないものとするだけの力をもっている。本によっては云是鉅の三字を省いて「東京才士文章公」とするものがあるけれども、これでは一首ぶちこわしである。燦然たる星座を胸につうね、宇宙の精氣を内に藏する天才ならば聲譽の空にとどき、筆の造化をおさなうこともあるのであろう。龐眉は長く大いなる眉である。以下二句を神原篁洲は「漢の顏駟に比して自ら謂ふ也。駟三代時に不遇、皤眉の年まで郎官に在て志を不得して、秋蓬の轉飄に感じて傷めり、誰か知ん一旦武帝の恩顧に遇て、遂に都尉となり死艸の再び榮えて華風を生ずるに似たることを也」と説いた。必ずしも顏駟にこだわることはないが好釋というべきであろう。結びの二句もピリリときいている。

この詩、いかにもスマートで確に凡手のよく出だすところではない。

けれども、いってしまえば〝ほめ上手〟たるにすぎぬ。ほめられた方で悪い氣のしなかったろうことはともかく、敢て洩らさじと努めた批評家たちは、長吉の他の秀歌をおいてこの詩のどこを買ったのか。詩論詩話のたぐいがたまたま「高軒過」にふれるときまって「長吉七歳にして辭章をよくし…」とくる。「七歳」とは何か。それは『唐摭言』の次の記事に明らかである。

賀年七歳、長短の歌もて名は京師を動がしき。時に韓愈と皇甫湜賀の所業を見てこれを奇とす。しかもいまだその人を知らず。よって相謂っていわく、「もしこれ古人ならば、われらが知らざる者もあらん。もしこれ今人ならば、あに知らざるの理あらんや。」たまたま晉肅の行止をもて言るものあり。二公よって騎を連ね門に造り、その子を（見人と）請う。（長吉）總角荷衣にて出ず。二公これを信ぜず。よって面あたりにて一篇を試みしに、賀は命をうけ、欣然として觚を操り翰に

一染すと妻帷にんなきがごとし。よって目けて「高軒過」という。二公。
大い民驚き遂に乘るところの馬をもて命じて鑣を聯ね、所居に還り、
親しく束髪せしめぬ。
「高軒過」がたった七歳の少年の作品だとすれば驚くべき早熟、むしろコ
マシャクレて可愛げがない。が、とにかく異才たるには相違なく、どう
やう批評家たちもそこのところにシャッポをぬいでしまったらしい。そ
うだとすれば、彼らの舌が欲したのは詩そのものよりは、おそえものの
ことばがき、いや、そのことばがきからどうやう作為せられたらしいこ
のエピソードに在ったのだ、ということにならないか。ところで、長吉
と退之の出會について今一つのエピソードが傳えられている。
李賀、歌詩をもって韓愈に謁す。愈は時に國子博士分司たりき。謁
客帰り極めて困れたり。門人（賀の）卷を呈するに、帶を解きつつ旋
かえしてこれを讀む。首篇の「雁門太守行」にいわく「黒雲壓城城欲摧、

甲光向日金鱗開」すなわち帯を援け命じてこれを慰えしむ。（張籍「古意」）

どちらが事實だったかわからぬ。唐の正史たる新唐書が採っているところからみれば、「高軒過」のエピソードが有力だったのであろう。詩中の「東京才士文章鉅公」や前記のことばがきが宋の史官のレアリズムにかなったらしい。ただ、長吉七歳は貞元十三年797で、韓愈三十歳、まだ「員外」ではなく、皇甫湜二十一歳進士にも登第しておらぬ。ことばがきが後世の竄入でないならば、この作はまず元和四、五年、長吉十九歳もしくは二十歳の作と見るのが妥當であろう。さらに、これは全くの管見ながら「龐眉書客感秋蓬、誰知死草生華風」あたりの語氣は諱手件をその前において味えばたいへん通りがよく、打ちひしがれた長吉をなぐさめようとしてうちつれだってやって來た兩人に、あえて愁眉をひらいて「我今垂翅附冥鴻、他日不羞蛇作龍」と應じたとする想像を禁じえないのだが、そうして、「雁門太守行」をめぐるエピソードの方が事實

に近いような氣もするのだが。いかがであろうか。

ともあれ文人が文名を識られんと欲するのは常情である。先進大家の一言が後進文士の進退を左右すること、今日の芥川賞選衡次第に見て明かである。ことに文官登用に詩を課し、一字一句が生殺を決定することさえ珍らしくなかった唐の代に「文章の鉅公」と世に許された退之に、初對面から絶大な賞讃を得たとすれば、この作が喧傳されて一向にさしつかえはない。しかしながら、事がそこに止るのみなら中唐ジャアナリズムの一話柄たるにすぎぬ。これを綿々千年の後に話りつぐ中夏文人の盲執のすさまじさは、それはそれとして興あるものには違いないが、時と處をかえた氣むつかしい讀者の賞翫に堪えるかどうか。

それよりも私がこの詩に見据えたいのは「筆補造化天無功」の一句である。

天が彼の土の人に對する位置はキリスト教徒の神にあたる。いかに憬

仰ぎ見る人とはいえ、その筆力を天の力と闘わせたりけせぬのがこの國の君子のならいであろう。詩經大雅烝民に「天は蒸(ちまた)の民を生(な)しぬ」と歌う。この天は、盆地の底からわれわれが仰いで見出す山にくぎられた空ではない。何十日歩いても同じ黄色い大地、その大地をたちまちにして濁流とし、緑野とし、砂漠とする変幻極りないものが天である。人がいかに願い、いかに怨み、いかに抗っても、これを動かす能わぬものが天である。易経彖傳の天についてしるした乾元には「萬物資始といい、地についてのべた坤元には「萬物資生」という。孔穎達によれば始とは「初めその氣を稟(う)く」ること、生とは「形を成す」ことで、天は萬物生成の基礎、地はこれを形體として完成させるものだという。これが抽象的な観念論と見えるのは温暖湿潤の島國に育った感覚からで、萬里の黄土に生をうけ、鋭く乾いた大氣を吸い、蒼々として高い天を仰ぐ民には、切れば赤き出る血と同じ生々しさで、天は一切を生育し、萬物に對して主宰

力をもつものであった。

韓愈はいう。「上に形るるもの、これを天という、下に形るるもの、これを地という、その両間に命あらしめらるるもの、これを人という」（原人）董仲舒によれば天の徳は「施」、地の徳は「化」、人の徳は「義」であり、天と地との中間に生を得た人間は天よりうけた魂（精神作用）と地よりうけた魄（肉體作用）から成る。両者が合すれば人となり、離れれば魂は天に、魄は地に還る。されば義すなわち人の道は天に従うことに他ならぬ。中夏における天と人との關係はかくのごときものであった。

「筆は造化を補う」というとき、なお天地の徳を分與せられた人間の功業をたたえることばとして傳統の外に出ずるものではない。「天に功なし」というに至っては、まさに殷帝武乙が天を射た暴虐にひとしく、明治以後の絶對主義帝政下日本で天皇を廢せといったに似た無謀の語ではないか。儒家を自負する退之がそこに心を留めなかったのはどうした

ことか。たとえ退之が見逃し、以後の文人がこれにならったのはやむを得ないとして、せめて正義派の歴史家あたりから「宗室の孫にして天を無みするはたゞ長吉のみ」ぐらいの慨嘆が聞けそうなものである。それより、長吉を憎んでその進士の試につくことをはゞんだ者が父の諱を持ち出すようなケチな仕業はおいて「天無功」の一句をこそ攻むべきであったろう。これなら大義名分も明らかで、退之に「諱の辯」を草せしむる煩いを省き、うるさがたの皇甫湜まで一束にしてばっさり斬ることができたろうものを。

あたしごとはさておいて、この一句こそ長吉の藝術に對する考え方を先人とはっきり分つものではないか、と私は思う。もっともこれには反駁がないではなかろう、ふとしたはずみに洩らしたことばの一隅を擧げて長吉を天に孑するものとなすのは「臣茂」の一語をもって總理大臣吉田茂氏を帝國主義者と斷ずるにひとしく、人を責むるに重にして周なる

一九五三、一二、四訂

ものだと。だがふとしたはずみにこそ眞情は流露するものであろう。「高軒過」の製作におくれること凡そ四、五年、次の詩がある。

巨鼻宜山褐
龐眉入苦吟
非君唱樂府
誰識怨秋深

巨いなる鼻（のわれは）山褐にふさわしく
龐き眉（へのひとは）苦吟に入りたもう
君が樂府を唱うに非れば
誰か識らん、秋の深きを怨みんことを

（昌谷讀書巴童答・III・104）

昌谷にあって讀書に倦んだ長吉がふと口ずさんだ「蟲響燈光薄、宵寒藥氣濃、君憐垂翅客、辛苦尚相從」の詩に從僕の巴童が答えた意を、長吉がさらに詩に裁したもの、その意の長吉の心にかなったのはいうまでもない。夏去り秋到るは天の營為ながら、秋の深きを怨むさえ詩人の表現を俟たねば人はこれを識る能わぬ。萬物を造化するのは確かに天であ

ろう。だがその萬物の萬物たる意味を見出したのは藝術家である。藝術家が明らかにしなければ一切は存すれども無きにひとしい。天が藝術家の筆を仮って語るのではなく、藝術家の筆が天のことばを摘出し、萬物の價値を創造するのである。

李憑中國彈箜篌

女媧煉石補天處
石破天驚逗秋雨

李憑が中國に箜篌を彈ずれば

女媧の石を煉って天を補いし處
石破れ天驚きて秋雨を逗す

（李憑箜篌引・I・1より）

李憑はすぐれた樂人である。彼が箜篌を演奏すると、むかし女媧なる帝王が石を煉って天をふたいだところさえ破れ、天は驚いて思わず秋雨をもらす。ここではもはや天は藝術家の意のまゝに一喜一憂する素

直な享受者たるに過ぎない。藝術家にかくの如き力を得しめるものは何か。表現技術である。だがこの技術はたやすく人の力となるものではない。されば之を龐眉の詩人も苦吟に入って自らを苛責しなければならないのだ。

表現の技術が強く意識されるということは、人間が自らの力、すなわち知識に目ざめ、これに信頼するということである。中夏にあっては、人間とその知識に對する信頼はむしろ傳統的なもので、儒家の禮樂尊重はその一つの大きなあらわれである。從って長吉の技術意識もまた傳統の流れを汲むものといってさしつかえない。しかしながらいかに人間とその力を強調しても「天我が材を生ず、必ず用うること有らん」（將進酒）で、天の指すところを限りとし、天の支配のうちにその力の用いられる場を見出すのが、天地の間に位置せられた人間の道であった。その限界を破ろうとするに至っては文字通り破天荒のわざといわねばならぬ。

深瀬基寛教授の教えるところによれば、神と競争する藝術家の大膽さを始めて指摘したのは、一六七九年ドライデンがシェイクスピアについて批評した言葉においてであった。教授はいう。

ひとは簡單に創造を口にするが、これは恐るべき言葉である。英語のcreativeがドイツ語でschöpherischと譯された當時のドイツの宗教家の驚愕と非難についてスミスは語っているが、故なしとしない。「詩人は眞實に着物を着せ、大自然を裝飾する、しかし眞實も大自然も、詩人のかて變更するのではない」――これはドライデンの言葉であった。この段階では未だ寫生という程度を越していない。しかるに、シェイクスピアはそれらを變更したばかりではない、「無からの創造」の奇蹟を行ったというのである。ところで無からの創造は本來神のみの仕業であり、またそうあるべきものである。だからドライデンがこの言葉を文藝批評の用語として使用するまでは、ギリシャ以來詩人は單に「作る人」であって「創

造者」ではなかった。ところでドライデンはまたこう書いている――「シェイクスピアは大自然のなかに存在しなかった一人の人物を創造いだようである。その大膽さは見るからに堪えがたいほどの大膽さである……」。それは神と競争する人間の大膽さなのである。この言葉の書かれた一六七九年こそ實に近代文藝批評の紀元元年なのである。Ortus est ex creation への質的飛躍の年、「奇蹟の年」annus mirabilis である。（エリオットの詩學）

ドライデンがシェイクスピアについていったこの「創造」と長吉が退之についていった「筆補造化天無功」とを直ち結びつけることは意味がない。兩者が生れてくる基盤たる歴史的環境が異る以上それは当然である。けれども、韓退之もまた、シェイクスピアとは違った方向にではあるけれども、中夏の文學史の上にコペルニクス的轉回をもたらしたものであり、その業績が天と競う「人間あ方価値發現を價値づけうれている」ことは不思議な偶合というべきであろう。

王直方詩話云 李賀高軒過詩中有筆補造化天無功之句 予每爲之擊節此詩人之所以多穿鑿也（漁隱叢話）

ヨーロッパにおいては「創造」はごうごうたる非難をよび起すに足る恐るべき言葉であった。「天無功」もまた中夏にあってはこれに劣らぬ恐るべき言葉でなければならない。こうした言葉を胸に蔵する詩人が世に喜び容れられるべきはずがない。事實、後代の批評家には長吉を異端と退けるものは少くない。異端としないまでも正統と見なかったことに間違いはない。しかし不思議なことに「天無功」の一句に着目したものが管見ながらほとんど無いのはいかなることであろう。一九五三、一二、四 訂

（コ、行次後改稿、コト）

もっとも、ごく僅かながら天との關係において長吉を見た人がないではない。それは他ならぬ長吉よりやゝおくれて世に出た『李長吉小傳』を書いた李商隱（字は義山）と『李賀小傳の後に書す』を書いた陸龜蒙である。たゞし義山のそれは、天への叛逆者としてではなく「白玉樓中の人」として、すなわち、天から厚く禮をもって迎えられる詩人としてであった。天が迎えるという、それでは「功無し」と斷じた長吉を天がか

一九五三、一二、四記

えって愛したのか。天みずから天に功なきことを肯ったのか。自らを無みする者をしなお禮をもって遇するほどに天の仁怨は深いのか。あるいは博大なる愛をよそおって叛逆者にこの上もない復讐を果したのか。『李長吉小傳』はいう。

長吉まさに死せんとす。時に忽ち晝のごとくにして、ひとりの緋衣の人を見る。赤虬に駕し一板書を持てり。太古の篆、あるいは霹靂石文のごときものにしていわく「まさに長吉を召すべし」と。長吉了に讀むあたわず。欷ち榻を下り叩頭していう「阿奚は老い且つ病めり、賀は去ることを願わず」。緋衣の人笑っていわく「帝白玉樓を成りて立ちぬ。君を召して記をつくらしむ。天上は差や樂しく苦しからざるなり」と。長吉獨り泣く。邊りの人ことごとくこれを見る。少らくにして長吉の氣絶ゆ。常に居るところの窓中烱々として煙氣あり。行車嘈管の聲を聞く。太夫人急き人の哭するを止めこれを待つ。五斗の黍を

炊くばかりの時の間のごとし。長吉竟に死す。

何という奇妙なことであろう。そうして、その奇妙さを義山もまた唄ぎつけていたのであろうか。『小傳』の文は更に續けていう。

あゝ天の蒼々として高きや、上に果して帝あるか。帝果して苑囿宮室觀閣の玩を有するか。いやしくも信に然るときは、すなわち天の高邈、帝の尊嚴、また人物文采のこの世に愈る者あるべきを、何ぞ獨り長吉に眷々としてかれをして壽ながくあらしめざるや。あゝ、またあに世のいわゆる才ありて奇なる者、獨お地上にも少からず、すなわち天上にも多からざらんや。

義山の發したこの疑問は屈原の『天問』にも劣らず重々しく苦渋にみちた聲として私の胸に響いてくる。

露膾未開對朝暝

「天無功」の一語が天に對してかくもおそるべき位置を己れのために設定するということは、高邪しながら「高軒過」を製した當の長吉には恐らく明らかには意識されていなかったに違いない。いな、反對に、中夏において詩人が本來あるべき姿としての、天とその權威者代行者たる天子の讃美者、すなわち頌歌作者としての使命を、自らに觀じていたのであろう。

上之回　大旗喜
懸紅雲　捷鳳尾
劍匣破　舞蛟龍
豈尤死　鼓逢逢
天高夢雷齊隨地

上の回りたもうや　大旗喜び
紅の雲を懸け　鳳の尾を捷つ
劍匣破れ　蛟龍舞い
豈尤死して　鼓逢逢
天高くして雷は齊しく地に隨ち

地無驚煙海千里　　地は驚くことなくして煙海千里

（上之回・四・183）

こゝにいう上之回とは天子の京師に回るを指す。推するに英主としての輿望をになった憲宗の即位を慶祝しての作であろうか。天子が都に回るとき大旗は喜色にみちてひるがえり、その紅の旗のつらなるさまは雲のかゝれるごとく旗首の鳳もおどり上ってたがいにその長尾をうち合う。正義の軍隊を祐けるという寶の劍はその匣をやぶって高く空に上り、蛟龍が舞う。蚩尤のごとき兇惡な賊徒はことごとく死に、王師の軍鼓は高らかに勝利をかなでる。天はあくまで高く、雷もまた天子の歸還を祝するかのようにひとしく地に隨ち、地上には驚きいましむべきものなく千里のあなたまで青海波のつらなることだ。（末の二句はよくわからない。今は吳正子の注によってかく解したが、王琦は「雷」を「雲」のあやまりだとして、瑞祥たる慶雲が地にたれ、海外千里の外まで烽火の警めを見ない

と釋した。意味はよく通るが、割切りすぎた感もないではない。）純然たる頌歌である。いかにひわくれた批評家といえどもこの詩に陰翳を見出すことは全く不可能であろう。

韓退之に見出されて間もなく長吉は河南府試に就く。これは文官資格檢訂の第一次試驗で地方の長官が主宰して行うのを例とした。長吉の受驗は退之が河南府の令（長官）となった元和五年庚寅のことだったと思われる。長吉の答案は「十二月樂辭」すなわち一年を各月ごとに一首、これに閏月一章を加えた十三首からなる雜曲のための歌詞であった。

上樓迎春新春歸　　樓に上り春を迎うれば新しき春は歸りく
暗黃著柳宮漏遲　　暗黃は柳に著きて宮漏遲し
薄薄淡靄弄野姿　　薄々と淡けき靄は野に弄むるゝ姿にて
寒綠幽風生短絲　　寒綠は幽かなる風に短絲を生ず

錦林暁臥玉肌冷
露瞼未開對朝瞑
官街柳帶不堪折
早晩菖蒲勝綰結

錦の林に暁を臥す玉の肌えは冷え
露の瞼は未だ開けやらずして朝瞑に對う
官街の柳の帶は折るに堪えず
早晩　菖蒲のごと綰ね結ぶに勝えん

（正月・I 24）

當時の長吉の心の弾みをこれほどヴィヴィッドに現した詩はない。一度にどっとやって來た喜びを、まだすっかりとは開ききらぬ瞼にうけとめかねる感じであり、その幸福を手折ってしまうのが惜しいような感情が末の二句にたゆとうている。このように明るい詩から〝鬼詩〟の作者を想像することは困難であろう。しかし出發から否定しか予定されない者ならば詩人とはならないであろう。そのような徹底的なニヒリストは詩を作ることそのことをも否定すべき立場にあるだろうからである。

飲酒採桑津

宜男草生蘭笑人
蒲如交劍風如薫
勞勞胡鶯怨酣春
薇帳逗煙生綠塵
金翹峨髻愁暮雲
沓颯起舞真珠裙
津頭送別唱流水
酒客背寒南山死

jíng zíu cǎi sang zin, í nán cǎo shēng cǎn siāo thén,

酒を飲む採桑津

宜男草は生じ蘭は人を笑う
蒲は劍を交ず如く風は薫る如く
勞々ける胡の鶯は春を怨む
薇の帳は煙を逗めて綠塵を生じ
金の翹、峨き髻（の女は）暮雲に愁い
沓颯と起ちて舞う真珠の裙
津頭に送別して流水を唱う
酒くむ客の背は寒くして南山は死す

（二月 I.25）

一月の詩に溢れた感情がそのまま流れこんだかと思われるような響きである。採桑津は『後漢書郡國志』に河東北屈縣にあるとしるされる古地の

名だが、これはまたおのずから桑の葉をつむ女たちの姿の隠見する嗜目の風景を描くことにもなっているようである。宜男草は萱草のことで、「わすれぐさ」の和名をもち、中夏の俗に妊婦がこの草を胸にかけると必ず男子を生むと傳える

pú rhú giáo giên feng zhú xyn,

pú と feng との軽く明るい音を二つの zhú がくすぐるように追い、その間を giáo と giên とがざわざわと波立ち、それからやゝ鋭く xyn の音が去る。さながら、ぎっしり繁った蒲の葉群に風が吹きまぎれ、厚くかたい葉が剣のようにキラキラ輝き音をたてゝゆくようである。

láo láo xú ién yán xan chun,

目くるめく光と響はやがてものうい疲れをよび、燕の翅の動きにも盛りをすぎた春をいたむ弱々しさがあらわれる。

uéi zhāng tóu ien sheng luq chén, gín kiáó è gi choú mú yn,

つゞく一句は低くたゞよう。薇帳とは花をつけたバラの叢がとばりをなす。流れる霧がこれをよぎるとバラの小枝が織りなす網目に細かなこまかな水滴がむすんで緑の塵を洗いたようだというのであろう。次いでほとんど凝むに似た重くるしい一行が夕ぐれの雲にむかう女の表情をおおう。金翹は黄金の首飾。峨髻はたけ高いかみ。その酒とは恐らく、た だ酒席を周旋するのみの女性ではないであろう。いな、この席に酒を汲むものはたゞ二人だったのであろう。女はこの重くるしさを振り切るようにたちより、眞珠をちりばめたもすそを飜して舞う。しかもそのしぐさに何と愁いのまつわることであろう。

tà sag kè cè zhen zhu kyn, zin tou sùng biéq chang liú shuì;

なぜかなら、その舞の終るとき、ふたりの離別が始まるのだから。「流水」の曲をとなえる歌聲は、その曲の名をさながらに去っては再びかえらぬゆく水のようにかなしい。

Zǐ kě bei xán nán shan ě.

いくたび酒を汲み、いくたび盃を交したことであろう。しかし體は火照ることなく、かえって背なのあたりが寒く、うち見やる南山の死んだようなその色！　南山といえばむかしから永遠のいのちにたぐえられて來たのだのに、別れのかなしみは永遠をやぶるかく斷つというのか。

詩は不意に打ち切られる。意味はなお意味を求めて次の句を喚ぼうとするのに……

宋の郭茂倩が輯めた『樂府詩集』には初句を「二月飲酒採桑津」とする。恐らくこの詩を傳唱した樂工のたぐいがみだりに「二月」の二字を加えて、他句とその長さを齊しからしめたのであろうか。みだりにというのは、この句の他句より短いことが、この詩が十句でも八句でもなく九句すなわち奇數の句からなる作品であるということと共に、この詩にとっての必然であることが「二月飲酒採桑津」とうたって來た人には考慮さ

れていないからである。中夏の詩は一句一句が獨立しながらも、二句をもって一つのまとまりをなす、すなわち「聯」で、聯がいくつか連なることによって完結するのを原則とする。ほとんど大部分の詩の句數が偶數であるのはこれによるのである。ところで長吉のこの詩は九句であった。第五聯がその半ばで引きちぎられたまゝ終っているのである。にもかゝわらず、「酒客背寒南山死」の一句が前の四聯全體と釣ごとなバランスを保っているのはこの句の意味のもつ重量によるというまでもないが、その重量自體が聯となるべき勢いを半ばでたち切ったエネルギーから生れたものであり、さらに、前の四聯のうちに初句のごとき不齊の句を包藏するという事情と微妙に照應しているのだ。いわばこの詩は、外形的な整いを無視することによって内面的により高い表現を獲得した作品なのである。

このように自由な詩型はもとより長吉によって創められたものではな

い。古詩とよばれる詩體はその句數・句の長短・韻まですべて自由であるのが特徴で、ことに漢代の軍樂である鼓吹鐃歌は長短錯雜し唐ひとの樂府もこれを継承し、別に「長短句」とも呼ばれ、李白などもこの體の詩を盛んに作っている。「十二月樂辭」が樂府なのだからその自由奔放なのは初めから予定されていたものだ。とはいえ、漢字そのものもつ性格、その漢字が結合して生れた中夏の詩そのものに整齊への欲求があり、ことに一つの句がつねに今一つの句を求めて聯となろうとすることは本能の如く強いものがある。長吉のこの詩の如きは他に例を求めて得られないことはないが、かなり稀なもので、かつまたよほどの名手でなければ試みて成功することの難いことはいうまでもあるまい。

東方風來滿眼春
花城柳暗愁殺人

東方より風は來たる滿眼の春
花城に柳は暗くしてヒトを愁殺す

複宮深殿竹風起
新翠舞衿浄如水
光風轉蕙百餘里
暖霧驅雲撲天地
軍装宮妓掃蛾淺
搖搖錦旗夾城暖
曲水飄香去不歸
梨花落盡成秋苑

複宮の深殿に竹風起り
新翠の舞衿は浄きこと水の如し
光風転蕙百餘里
暖き霧は雲を駆って天地を撲つ
軍装の宮妓の蛾を掃うこと淺く
搖搖たる錦旗は城を夾みて暖かなり
曲水は飄香い去って帰りきたらず
梨花落ち盡して秋苑となる

（三月　I・26）

東方より風来たって見わたすかぎり春ならぬはない。花さきみちた城に柳の緑のみ濃く暗いかげをやどして人をして春愁にたえがたからしめる。幾重の高閣をつらねた宮居の奥ふかく竹むらをそよがせて風おこれば、舞いひめたちの翠の衣はさざめき流れる水のように浮らかだ。日の

光はあまねく、風は百里のあなたまで蜚蠊しげるにおい草のゆえをかぶ
ぶき渡り、むせかえるような陽氣は雲を駆り天地を撲つ。武人のよそお
いをこらした宮妓たちはまゆを淡くはき、ゆらゆらとはためく錦の旗は
城をせまく見せるまでに林立している。
暖の字が二箇所に用いられているほどに、禮麗を春するだが、秦
宮中をいくえにも曲りくねってゆく川の水が香ぐわしいみなわをうか
べてたゆよいたれば、それはもはやかえることはない。そうして、梨の
花が散りすぎると、すべては秋の苑のように蕭條たるすがたに化してし
まう。
何氣なく挿入された曲水觀香の四字が前の八行をおし流し、つづく去
不歸で舞台を一轉する。こゝにあらわされているものは、中夏の詩の根
底にある推移の感覚とよばれるものである。だが同じく推移の感覚から
生れた劉廷芝の「代悲白頭翁」とこの詩をくらべてみるがいい。長吉の

詩が著しく即物的であり、さらに立體的であることが知られよう。この相違がそれぞれの作者の資質に歸せられるのはいうまでもないが、兩者の間に杜甫という偉大なレアリストの存在することを顧慮しないわけにはゆかない。この二つの詩についていえば、その間に杜甫の「江碧鳥逾白、山青花欲然、今春看又過、何日是歸年」をおいてみれば、長吉と杜甫との距離が、劉と杜とのそれに比べていかに近いかがわかるであろう。

曉涼暮涼樹如蓋
千山濃綠生雲外
依微香雨青氛氳
臙葉蟠花照曲門
金塘閑水搖碧漪
老景沈重無驚飛

曉涼し暮涼し樹は蓋如して
千なす山の濃き綠、雲の外に生やけし
依微に香りふる雨は青く氛氳め
臙らの葉はた蟠花の曲門に照りこそはゆれ
金塘をひたす閑水は碧漪なし搖らぎ
老りし景い沈重しくて驚飛ぐもの無し

墮紅殘蕚暗參差

墮ちし紅と殘りし蕚、暗うして參差や

（四月　I・カ）

もうそこに來ている初夏のさわやかさが初二句にのぞいているが、お晩春の氣分重厚に沈んでいる。これもまた奇數の句からなる詩で、末句の「墮紅殘蕚暗參差」が一首を要約する重要な句であることはいうまでもないが、前の二聯とは對立せず、むしろそれを自らの内にひきつけつゝ初二句と對照しているところが「二月」の詩と異る。

彫玉押篆額
輕穀籠虛門
井汲鉛華水
扇織鴛鴦紋
回雪舞涼殿

彫玉　篆額を押え
輕穀は虛門を籠しぬ
井に汲むは鉛華の水
扇に織るは鴛鴦の紋
回雪舞いぬ　かの涼殿に

甘露洗空緑
羅袖從徊翔
香汗沾寶粟

甘露洗う　空の緑を
羅袖　從ら徊翔り
香汗沾ど　寶粟なすも
（五月　I・28）

甘露洗空緑をそのまゝに目のさめるような詩である。ことに香汗沾寶粟の句のごときは抜けるように白い柔肌にふつふつとふき出した汗の玉の透明を目のあたりに見るようだ。この作、一點技巧のあとをとゞめないが子細に見れば、第一句が「鉛華」「涼殿」「羅袖」を喚び、第二句が「鴛鴦」「空緑」「香汗」を起し「沾」が「洗」をうけ「從」が「舞」より引き出されるなど、字々句々が互いにcorrespondして見事なパターンを織りなしている。あるいは、少年の爽やかな戀情が一顆のエメラルドに磨き上げられたといってもよいであろう。

裁生羅　伐湘竹
帔拂疎霜簟秋玉
炎炎紅鏡東方開
暈如車輪上徘徊
啾啾赤帝騎龍來

星依雲渚冷
露滴盤中圓
好花生木末
衰蕙愁空園
夜天如玉砌
池葉極青錢
僮歌舞衫薄

主羅裁ち　湘竹を伐り
帔はも　疎霜拂うべく、簟　秋の玉か
炎炎だつ　紅の鏡の東方に開けそむるに
暈は車輪のごとく上徘徊う
啾啾ち赤帝や龍を騎りてけだし來れる

（六月　三・四）

星は雲の渚に依って冷え
露は盤の中に滴って圓なり
好き花は木末に生ず
衰えし蕙ぐさ　空き園に愁えぬ
夜の天は玉しける砌のごとく
池の葉　極からに青き錢……
僮かに歌う　舞衫の薄きを

稍知花蕚寒
曉風何拂拂
北斗光闌干

稍知ゆ　花蕚の寒たきを
曉の風は何ど拂々
北斗の光の闌干しきよ
（七月　一.三〇）

灰白い天の川のほとりに青く冷い光をはなっている星。青銅の盤に滴って圓らな露。木々のこずえに美しい花々。人氣のない園にむなしく白う草々。夜空は玉をしきつめたにわ、池の睡蓮の葉は小さく小さくなって丸い青銅の錢を撒きちらしたようだ。夏の夜もいつかはいやりとして來て薄い舞いごろもの衿をかき合わす。坐った花むしろもやゝ肌寒い。さっと吹いて來た風にはもう曉のけはい。そうして、いつか傾いていた北斗星の何ときらきらと輝くことか。

この詩をランボオの某中に見出してし人は怪しむことをしないであろう。私はこの詩をこよなく愛する。

孀妾怨長夜
獨客夢歸家
傍檐蟲緝絲
向壁燈垂花
簾外月光吐
簾内樹影斜
悠悠飛露姿
點綴池中荷

孀の妾は長き夜を怨み
獨き客びとは家に歸るを夢む
檐べに停りて蟲は絲を緝り
壁に向って燈は花を垂くす
簾の外に月の光は吐やき
簾の内に樹の影は斜めなり
悠悠に飛りたる露の姿
點こなたに綴ばめし池の中の荷……

（八月　I・31）

簾外月光吐、簾内樹影斜の一聯はことに美しく、悠悠飛露姿、點綴池中荷の兩句は無限の情をたゝえている。

離宮散螢天似水

離宮に螢を散して天は水に似たり

竹黄池冷芙蓉死
月綴金鋪光脈脈
涼苑虚庭空澹白
露花飛飛風草草
翠錦斕斑満層道
雞人罷唱曉瓏璁
鴉啼金井下疎桐

竹黄ばみ池冷やかに芙蓉は死れぬ
月は金鋪を綴じて光脈々く
涼しき苑、虚き庭、空しく澹白し
露おく花は飛飛にて風は草々
翠錦なすきざさは斑れて層道に満こる
鶏つぐる人、唱うを罷めよ、曉の瓏璁しかば
鴉啼きて金の井に疎桐下らす

（九月　I 22）

もうほかではめったに見なくなった螢が、この離宮にはあちらこちらに明滅していて、夜空は水を流したようだ。竹の葉はすでに黄ばみ、池は冷やかで芙蓉はもう枯れている。月はまるで扉の環をとめる飾り金のような模様をそのおもてに描いてあまねく地上を照している。凄涼として人の氣配もないこの苑庭の何と白じらとしていることか。花にしとら

においた露、草をなびかせてそうそうと渡る風。道をおゝうまでにはびこった木草は緑に江に、さながら翠錦をひろげたように、眼を奪うきらびやかさだ。遠く聞えるのはあれは時を告げて歩くんの聲、あゝ、時をつげるのはもうやあるかいゝ、かすかにあけ方の光がさしそめて来たではないか。鶏が啼いて飛びたつ。こがねの井戸に、しうすっかり枝のすけてしまった桐の梢から、ぱさ、と葉が舞いおちる……！

玉壺銀箭稍難傾
紅花夜笑凝幽明
碎霜斜舞上羅幕
燭籠兩行照飛閣
珠帷怨臥不成眠
金鳳刺衣著體寒

玉の壺の銀の箭は稍やゝに傾き難み
紅花は夜を笑みて幽き凝み明み
碎き霜斜に舞いて羅幕に上きぬ
燭籠は兩行にして飛閣照らす
珠帷も怨み臥すよは眠りがたくて
金鳳の刺の衣いたずらに體に寒し

長眉對月闘彎環

長き眉と月と闘えんにいずれか彎環き、

（十月　I・33）

水を満した壺に目盛を刻んだ箭を沈め、漏れ出た水の量をはかって時をしらべるのが唐の代の時計であった。陰暦十月に入ると水はようやく凍てと流れない。「稍難傾」とはこれをいうのである。缸花は「八月」の詩にあった燈花と同じい。燈心のさきに生ずる燃えかすのかたまりで形相似によって燈花とも丁字頭ともいう。この花の生ずるときほのほは暗くなりまたぱっと明るくなったりする。さきの「燈蛮花」こゝの「凝幽明」がそれである。氷を砕いたようにあらい霜が風に吹き上げられ斜に舞って羅幕に上る。高閣の左右につらねた燭もいたずらにしらじらしく、球のとばりのうちに臥す美女も心に愁むすぼおれてねむる能わぬ。金の鳳を刺繍した衣も、その金ゆえに體につけて冷たい。ねむれぬまゝに月に對ったかんぼせのひときわ長い眉引は、さながらにその彎環を新

月とあらそうに似て…

結句がこの詩の眉目たることまたいうまでもない。佐藤春夫氏は長吉の「園中莫種樹」をジャン・コクトオの詩にたぐえたが、この句の機智はさしずめあの有名な「シャボン玉の中へは庭は這入れません　まわりをくるくる廻っています」（堀口大學訳）に匹敵するものというべきか。

宮城圍圍凜嚴光
白天碎碎墮瓊芳
樞鐘高飲千日酒
戰卻凝寒作君壽
御溝冰合如環素
火井溫泉在何處

宮城を圍圍れるは凜さむし嚴し光や
白き天より碎碎とちり墮つる瓊の芳
鐘を樞いて高の飲まんかな千日の酒
凝る寒さを戰却て君の壽を作がんため
御溝は冰に合ざされて如し環素
かの火井、はた溫泉は、何処に在りや

（十一月　工・汗）

「圍圓」はあるいは「圍圓」かとも疑ったが、他の本は「圍廻」とするので、「めぐる」と譯してみたが、よくはわからない。「白天碎碎隨瓊蕚」フランスの詩人に「青空士官が帽子の飾毛をまきちらす」といった詩があって、雪をうたったものだと聞いたが、長吉のこの句を見ると、いつもそれを思い出す。彼の發想にはどうもそういうところがあるらしい。「千日酒」中山の酒家に一たびふゝめば千日醉を保つという酒を、義していた。劉元石がこれを試して家に歸り醉が發して睡る。家人は、死人だものと思って葬った。三年目に酒家の主が思い出して劉の家を訪ね、棺をあけると「あゝ好い氣持だった」とのびをして劉が起き上った、という話がある。だから次の句の「戰却凝寒作君壽」がピンとひびいてくるのだ。「冰合」王琦の本には「泉合」とあるが、他本によった。その妥帖なるをとったのである。「疋井溫泉」謝惠連の『雪賦』に「疋井滅、溫泉冰」の句が見え、李善が『博物志』を引いてこれを注し臨邛

の地にある火井は諸葛孔明が徒って視た後いよいよ盛んに火を吐いたがのちに人が火を投げこんだために滅んだという、王琦は長吉の句に注して邛部縣の温泉は疾病を治したという。大雪は瑞祥とされた。さきの「作君壽」もそれをきかしたものであり、溪土のならいをうけて、萬葉の歌人もしばしば雪をことほいでいるが、長吉がこの詩の末に「在何處」と他を言うごとき口ぶりに何やら諷喩の意が見える。

日脚淡光紅灑灑
薄霜不銷桂枝下
依稀和氣排冬嚴
已就長日辭長夜

日脚の淡き光も紅のいろ灑々になりぬ
薄霜いまだ桂枝の下に銷えねども
依稀に和く氣はありて冬嚴は排びぬ
こは已に長日と就りて長夜の辭辭をなるべし
（十二月・I・35）

冬極まってすでに春色の動きそめた氣配をたくみに捉えている。

帝重光　年重時
七十二候廻環推
天官玉琯交刹飛
今歳何長來歳遅
王母移桃獻天子
義氏和氏迂龍轡

帝に重光いますゆえ　年にも重時
七十二の候うち廻環り推しうつり
天の官の玉の琯　交刹り飛び
今の歳の何ぞも長く來ん歳のかくは遅きや
かの王母桃を移ちきて天子がへに獻めし故か
あるはまた義氏和氏が龍の轡迂べしためか……
（閏月　I・36）

明徳の君が相ついで世に出るのを「重光」というからには、年に「重光」があってさしつかえはなかろうというわけか。一年二十四氣、各氣を三分して七十二、その七十二の候がぐるぐるとおしめぐりあでたく新年の御慶とくるはずを。天文博士が時をはかるには玉の琯に灰をつめ、灰の飛び上りようで知るというが、その灰が剰って飛んだために、今歳がいつまでもこう長く、來年のやってくるのが遅いのか。あるいは西王

母が三千年に一度みのるという桃を天子に献じたためか。日の車の御者の羲和が車をひく龍の轡をひきそこねたためか。

駄々ッ児めいた口ぶりで、閏月などといって一年を一ヶ月も長くするのは何ごとかとゴネている風情である。譯のわかりにくいのは私の不才によることはいうまでもないが、もともとこの詩自體がむやみやたらに故事を引き、さらにそいつを一ヒネリも二ヒネリもして地團駄ふんでいるのだからやむをえない。羲和を義氏和氏と二人にしているのは「其の意を失したものだ矣」と呉正子が註しているが、これは「馬の実鹿の字」というたぐいで、きまじめにとる者が「其の意を失した」ことにはならぬか。

以上十二月樂辭の全章を煩を厭わずに挙げたのは、製作時期が明らかに第一期に屬するものであること、長吉詩の特徴ともいうべきものの種

種の相があるものは明らかに、あるものはかすかながら、ここにすでにほとんどすべて含まれていることを顧慮したためである。王琦の引くところによれば元ひと孟昉は「李長吉の十二月樂詞を讀むに、其の意は新しくして蹈襲せず、句は麗わしくして怠(だら)淫ならず、長短一ならずして、音節また異れり」といゝ、明ひと余光は「二月の送別に折柳を言わず、八月には明月を賦せず、九月に登高を咏ぜざる、皆な俗法を避けしなり」と評するのは語は簡なながら、長吉の詩の本質にふれえたものとしてよいであろう。

一年を各月ごとに歌うということは、時間の推移をその基調とする中夏の詩人の感覺からして當然のことと考えられるが、しかも事實においてはそう多くを見ないようである。吳正子の注によれば漢の章帝に「靈臺十二月詩」十二首があり、古樂府に「月節折楊柳歌」があって正月から十二月にいたり閏月に及んで各月一首あり、長吉はこれに倣ったので

あろう、という。私の寓目したところでは、長吉以前には沈仲昌など十人の唐の詩人が「憶長安」なる題で十二月を一首あるいは二首、各月の詩を賦していう（但し五月を缺く）。長吉以後には元ひと趙孟頫に「題耕織図二十四首奉懿旨撰」、清の洪亮吉に「里中十二月詩」十二首があるが、これもどうやら玲りしがられる部類に属するのではなかろうか。

さて、われわれは須歌者たるべき門出を持った長吉が、その初期の作品にすでに妖しい「不協和音」を充ちるごとく見て来た。これは恐らく長吉の資質に根ざすものであろう。けれども「不協和音」的なこの妖しさがやがて主調となるためには、個人の資質のみでは解きえない問題に逢着する。

死角の眼

唖者の歌

幇間の國にあっては、要するに沈默し、土下座し、ひたすら命令された太鼓を打鳴らすことが一切なのだ。

禍なるかな、こういう姿勢をとり得ない者は此の國での生活は奪われねばならない。

例えば君主の威德の如きも、その重石のような壓力で民草の生活を打ひしいで、植物標本にする以外の何物でなくても、まるで「さざれ石」の輕さでこびられ、民草はなお「生けるしるし」の歓聲をあげねば生存が脅やかされることになる。

歓聲。沈默の自由すらなく、唖者にも尚かつ唖者の歌が強要されるの

だ。

だから自ら臣民を標榜する尊大な民草の代表者は、此の間の事情をよく心得ていて、巧みに同類を食い物にする。「義は山嶽よりも重く、命は鴻毛よりも軽し」というような言靈の魔術は昨日の彼らの常套であったが、民主々義ですら、彼らの手にかかれば合法的な術策に化けるから始末に悪い。

此のようなニヒリズムの大旗が君主の威風に勇ましい旗風を鳴らしながらその威徳を讃仰すべく強要されるのだ。

民草を常食する君側の草食獣の兇悪さよ。君主ですら彼らの口には一介の草木でしかあり得ない。犠牲の第一号は或いは君主自身であるのかもしれない。

だが一度唖者にまで訓練されてしまった民草の諦観の蒼白さよ。

歴史の辨證する時間を無視して、太古の海底へまで復帰せしめんため

なおし生長する小石の神話が謳歌され續けているのは、如何にも奇怪な御時勢のすがたではないか……。

MORAL BACK BONE

此の國のインテリはそのレジスタントの姿勢に於てすら生得の蒼白さを喪失していない。誰が彼らの行為にまでがソリンの臭氣をそゝぎこんだのだ。今日インテリを自称する連中が、一かどの先覚者面を氣取りながらレジスタンスのバスに便乘したがるのもアプレ的現象の一つであろう。だからレジスタンスのバスはアプレ型知性の罐詰とでも言い得よう。かの超満員のバスの中にひしめき合っている連中は自ら moral back bone の持主だと氣取っているのだがこれはどうも眉つばものである。

レジスタンスのバスも亦その運轉手は唯一人であり、その一人者は悉

も角も一應の敬意が拂われて然るべきなのは認めるにやぶさかでないが、便乘者は何時の場合でもそうであるように、其の他大勢の大根共であり、勿論大根に moral back bone などあろう筈がないのである。

彼らは、抜目なく流行のバスに便乘したままであり、彼らの氣にするのはその進行方向ではない。その back glass に映った時代の後退する風景を観ることによって悦に入っているだけの話だ。だからこれも一種英雄氣取の masturbation に他ならない。back glass の映像は歪曲されたものであり、車体のすぐ後の物体も非常に遠い距離感が錯覚される。

こういう錯覚が大根的知性には實感としか錯覚しないらしく、その鏡面に映じた時代の大象はすべて戰爭犯罪者の軍配に躍らされた愚昧の徒であり、自分らとは隔絶された距離があるかの如き優越感にひたりながら虚妄な speed の快感に酔っているのである。これは如何なる Complex に屬するのか……？

だが彼ら大根共は知るがいいのだ。彼らが愚弄したつもりでいる、大象はそういうバスの後塵を拝するほど愚昧ではないことを。彼らはバスの耐えられない後塵に聳縮しながら時代の空氣にもっと新鮮な酸素を要求している。

日本のレジスタンスがいやにガソリン臭いのは國民がよく知っている。レジスタンスをほこる日本のインテリ諸君よ、君等こそガソリンの臭氣に酔っている旧態依然たる青白きインテリなのだ。私は無知なるが故に神に酔えた昨日の私自身をいたわりたいのだ。今日目醒めた私はたとえ世すいぜる蒼白の容貌をさらしていても……

PASTRAL LOST

壓搾された時代の空氣の中で、人民が自由を謳歌出來るとでもいうの

か。奴隷なら或いは歌うことだろう。呻吟の歌を、そして悲鳴の歌を……だが春の陽を浴びて裕々と青草を喰んでいるホルシュタイン牛のいる牧歌的風景は東洋のスイッツルのものではなさそうだ。人民はそういうのどかなアルプスの景色の牧歌が今時何處を流れているか知る由もない。彼らは時代を推進させる汽罐の中で警笛をならしながら呻吟や悲鳴の歌をうたっている。奴隷の苦悩が霊歌にまで悲しく奏でられたように、與えられたスイッツルの人民はもはや牧歌をうたうべく存在はしていない。警笛の歌は……そうだ、呻吟や悲鳴や饑餓や自由を歌うものは呪われている。

彼らは犯罪者であり、保菌者である。蒸氣々罐の中で消毒されねばならない。

そして消毒のために近代資本主義は巨大な汽罐を準備している。殺生が生産に直結するシカゴ仕込のお手並はさすがに見事なものだ。

八千万個の罐詰製造は朝食前の軽い運動に過ぎない。そして美しいレッテルがはられる。平和だ、文化だ、獨立だ、東洋のスイッツルだ、文化観光國だ。その色彩の何とケバケバしいことよ。成るほど文化観光國ではある。一國の王子様が罐詰の宣傳に一役買わされて、海を越えて嬌笑を振りまかねばならない國は……

だが罐詰にされた牛肉が救歌をうたえるとでも思っているのか……

これは夢を失った二十世紀のメルヘンだ。

犬公方

スマートな最新型の自動車が、あずき色の車体を輝かせながら、彼方から見る見る突進してくる。運轉臺にはでっぷり肥えたアメリカの中年女が乘っていて、口をもぐもぐ例のガムをかみながらハンドルを手にし

ている。後の客席には誰もいない。いや犬が一匹乗っている。ひょうきんな毛むくじゃらの白犬だ。窓から前脚と首をつき出して外を見ている。スピードに長い毛なみをなびかせながらキョトンとした面だましいだ。自動車は軽快に疾走を續ける……だが後の砂塵の何とすさまじいことよ。道行く人々は皆しかめ面して頬をそむけるのだが、それだけではとても追っつかない。一時はどうでも呼吸を停止せざるをえない程だ。自動車は窒息をふりまきながらなおも走り續けて塵埃の中に姿を沒した。これは一すじの紋首刑の風景だ。自動車のテンポが遅かったらやり切れまい。吾々の封建の昔には何だかこれと同じような光景があったような氣がする。……犬公方様のお通りだ。これはテンポがのろい……

ボードレールもうたっているように、由来犬共は香水に鼻をそむけるそうだ。勿論犬の趣味は犬らしく香水などよりも首輪や鐵鎖の方が好ましいのに相違ないのだが。だから犬族が自分と同様に人間に對しても手

錠や鐵鎖を強要したがるのも無理はないのかも知れない。そして犬族が権力の王座にすわった時代は犬公方の暴力下に人民が齒ぎしりしながら呻吟せねばならなかった。眞人間は歴史上の如何なる時代にも案外多かったことだろう。現代だって同じことではあるまいか。眞面目な人間も生きるためには止むなく鎖や首輪に妥協せねばならないのだ。そして犬族の秩序に反抗するものも自らの非力を如何ともしがたく、犬小屋の嗅氣滿々たる雰圍氣に妥協を餘儀なくされたけれど、彼らはそういう嗅氣が犬族の嫌厭する香水の芳香によって超克されるべきものであることを寸時も忘れはしないだろう。

私は一滴の香水の可能性によって犬小屋に犬の暴力下に犬の趣味に同化せしめられない眞面目な人間の手記を讀んで面白いと感じたことがある。そしてその一滴の香水の可能性とは……？

犬族の秩序に反抗する人間は、勿論犬小屋につながれて犬の趣味に同

化すべく教育されねばならなかったわけだが、彼らは犬族のなまくらな眼をかすめて外部の同志と生々の氣脈を通ずるに不自由ではなかったというのだ。

差入れられた書物の字面が犬族のお氣に召すものであってもそんなことは問題ではなかったのだ。

犬の臭氣にうんざりさせられている人間にとってインキや紙のかおりもまんざら悪くはなかろうが、彼を激動したのはその書物に封じられていた一滴の香水であったという。かくの如く繊細な同志の心遣いが封じ込んだ香氣のもたらした効果は解放をねがう人間をしていかなる犬族の拷問に對しても屈服せしめなかった。それは決してセンチメンタルな感涙を誘うようなものとはものがちがう。中年の女がもちいる香水の効果とはものがちがうのだ。それは人間が犬族の支配に妥協せねばならない社會機構の矛盾を最も端的に示唆している。

搾取された汗は花の芳香にまで昇華されねばならない。これはガソリンの臭氣に窒息を餘儀なくされている吾々の現實生活の雰圍氣の中で類をしかめながらの思索である。

人的資源

饌首と呼ばれた中國の蟻は遠い歴史の昔から孜々として万里の長城を築かされている。同じくエジプトの黒蟻も巨大なピラミッドの構築に餘念がない。そして日本の黒蟻も何か無意味な建設に動員されつつ昔も今も土ぐもの吸血の対象としてのみ存在している。日本の土ぐもは万里の長城もピラミッドも築きはしない。土ぐもは黒蟻に万里の塹壕を掘りめぐらせてその前衛に黒蟻の棒杭を打ちこんだ。人柱とよばれるこの黒蟻の棒杭には毒針のある鉄條網が張りめぐらされ、黒蟻は生きながら塹壕

内に安居する土ぐも族に生血を吸わねばならなかった。敵は遥かな前方にいたのではなく、自ら振らされた背後の蠱壺の中にうずくまっていたのだ。

逃げ出すわけに行かない黒蟻共は蟻地獄に落ちて毒針の洗礼を受けた。民族のように静かであり諦観的であった。これが昨日の蟻の姿である。だが土ぐもが退治された今日では、黒蟻共は毒針の鉄條網からは一應解放されたかに見えるが、同じような運命の苛酷さが待ちうけていた。今や曽ての黒蟻は膏然と画一化されて枕木にまで訓練されつつある。そして今度は鉄路にしばりつけられようとしているではないか。見給え、彼らの油と鉄粉とに汚濁された面を。

土ぐもからの解放はむかでへの奉仕に他ならなかった宿命に彼らの諦観哲學は増ます困惑の相貌を呈しながら宿命の定位置に酬列を餘儀なくされつつある、赤信号はむかでへの抵抗であり得るかどうか、それは枕

木にとって未知数の課題であろう。

兎もあれ、鉄の支配する時代に叛逆の可能性を否定せられた八千万の枕木は時代の重壓に耐えながら腐って行く自分をどうすることも出來ない。そして日本の狭い國土を葉脈のように鉄の網が張りめぐらされ、枕木は太い犬くぎでしっかりと止めを刺されて身動き一つ出來ない。非力の枕木はひたすら沈黙を守りながらむかでの重壓に耐えて、俵藤太の出現を念じながらも腐って行く自分を意識している。

腐る！　だがいくら腐ってもいいのだ。腐ったものはいくらでもとり代えるのに不自由はしない。腐った枕木は次から次へ幾らでも更新されるに事缺かない。何という新陳代謝の旺盛さよ。

此の旺盛な過剰価値に眼を光らせているむかでの正體は何者なのか。枕木の無盡蔵な生産を得がたい唯一の富力として今度は誰が老獪な毒牙を磨いているのだろうか。

誰か蟻の世界に夢を否定するユートピアを夢想しているのだろうか。

血液銀行

書は蝿が　そして夜は蚊が跳梁する季節だ。
枕許にふと蚊の鳴聲を耳にしてほの淡い季節の哀感を呼びさまされるのも日本人らしいが、今日の吾々の生活ではそういう趣味的な餘裕はどうやら楽にしたくもなさそうだ。
蚊といえば一番えげつなく刺す奴は例の藪蚊族である。
毒針を刺し込んで生血を吸いとり、肉体を熱病バチルスの植民地にする文字通りの吸血鬼なのだ。
悪性の医者を藪医者と云うのは何時の頃からそう呼び出したのかは知らないが、彼らも市井のジャングルに群喰う藪蚊族の一種であるのは昔

今も同斷である。

一才蠅の方はどうだろう。毒針こそ持たないが蠅が蚊に劣らぬ惡魔であることは言うまでもない。昨日の中國は此の惡魔の温床であった。それほどにも蠅族の天下であった中國であればこそ驥尾に附いて千里を走る蠅の話も民族的な故智として學ばれた所であろう。所で中共からの引揚者の話によると今日の中國の大都市では蠅が完全に抹殺されたというから大したものだ。從って今日の中國では驥尾について千里を走る蠅のモラルなど時代錯誤なのだろうか、少くとも昔ほどにはその投機性が価値を認められなくなりつつあることは考えられよう。これは友好善隣の立場からお目出度い話ではないか。我國も早くそうなりたいものだ。所が四島國日本の現狀はどうだろう。夜見の國らしく蚊や蠅の天國であるのは古事記の昔も民主主義を標榜する今日も相變らずの始末である。これは日本の社會が、未開のジャングル性を革命されない限りどうすること

とも出來ない。問題はいつも其處へ落付くらしいが、そんなことを志士氣取りで大言壯語しても始らない。

今日の日本人は決して肉食的民主々義者に見られるような堂々たる体軀のものなどではありえず、あっても例外で、何れも青息吐息の貧血患者ばかりだといっても過言ではあるまいと思うが、その身動きもかなわない貧血患者の不自由さにつけこんでその生血を腹一杯御馳走になった蚊が太平洋を横断するという話はどう考えても例の神話の類と笑殺されようが、こういう神話の可能性が見事に實証されて目下此の國の蠅蚊族の流行現象となっているのだからやりきれない。

彼らが驥尾に附して千里を走る昔日の中國蠅の故智にあやかり太平洋を飛び切るのは例の羽田の空港から空飛ぶホテルに一寸便乘してのことだ。

だから日本の吸血鬼は民主々義の忠實なる信奉者たる貧血患者のなげ

なしの生血を吸って太平洋横断の白昼夢を実現させると云うことになる。これこそ科學の世紀の神話でなくて何であろう。

さてこそ、そういう奇怪な現象も夜見の國の蚊族と蠅族との関勢力を背景にして考えれば成る程と、貪血種族は彼らの旺盛な跳躍振りを默視する以外に手はなさそうだ。

所で貪血族は海の輝く彼方の星の輝く民主國へ、このように聖なる十字軍を送って民主々義勉強に精出しているから頼もしい限りだ。

それらの蚊軍はやがて再び歸って来るだろう。新しい吸血の技術と新しい回歸熱のバチルスをしこたま仕入れてだ。

たかが一匹の蚊といっても二度まで太平洋を飛び越えると自ら貴族がそなわって来る。彼らは貪血族の頭上に小面憎いまでの羽振りをさかせてまるで功成り名遂げた凱旋將軍だ。遺憾ながら貪血的民主々義者の死んだようにたるんだ眼には特權者としての彼らの一言一行はまるで天來

の福音でもあるかのような權威を以て讃仰される。これが四島國的民主々義の実体である。

その擧句の果は、相變らずの洋行帰りのレッテル崇拜にいよいよ生血御供を有難がりながらとんでもない熱病の注射の洗禮に隨喜の涙をこぼしている。

悪魔に魂を賣った話はファウスト博士の昔から科學の國でも人間劇の定型律なのだが、新しい時代には人道主義的合法の假面の下に血液銀行というものが誕生した。

シャイロックの時代には彼の凶悪な數数性を以てしても人間の血液は利害打算の圏外にまだ神聖視される餘裕を示したが、新しい十字軍の戦士がもたらしたものは血液も直接貨幣価値にまで換算され得るということであり、これがどうやら本場仕込の民主々義の根本理念でもあるらしい。こういう時代に四島國の貪血種族は如何なる実存を信じて生きれば

いいのだろうか。

今日の日本ではゲーテの「蚤の歌」に匹敵し得る「蚊の歌」や「蠅の歌」が当然生れねばならない筈だが……貪血種族はそういう歌を唱う元氣しない。貪血症患者に強烈な生氣の歌は却って毒なのだろうか。

既成品としてのデモクラシイ

靴屋で足に合わせた時には如何にもピッタリするので、これなら良かろうと得心ずくで買って帰った筈の既成品の靴をいざ着用に及んでみると早速足の皮をすりむいてしまったという經験は既成品しか買ったことのない吾々には笑えない茶番劇であろう。

新品はいいとしてその靴を光らせながらびっこを引いている人間の滑稽さはまさに正に靴によって脚下を照顧すべく教えられている図である。遺

憾ながら我々の日常周邊にはこれに類する光景がいくらでもころがっていて、お互に身につまされる苦笑の体験は數え切れない程であろう。然しこういう一寸した茶番劇も買った当初の間だけで、やがては靴と足とが適当に妥協し合って、いとも圓満に事が解決されてゆくから有難い。全く融通無碍である。何も既製品だからと云って捨てたものではないわけで、吾々日本人は遠い祖先の時代から常にこういう不具合や苦痛を克服して今日に及んでいるのである。因に日本歴史をひもといていつも考えさせられることなのだが、大和民族なるものの長所というか美点というか兎も角も他民族と異って優れている特色は、こういう他人規格の既製品を着用して、それを如何にも迅速に自身に適應させる能力を先天的に資質としていることだ。これは恐らく民族的優位性として吾々日本人が矜持して然るべき性格ではあるまいか。こんなことを言うと第二文化論云々が跳び出さないとも限らないが、矜持はともかくとして確かに優れ

た能力の一種であることには間違いなかろう。

実際他民族の文化財を攝取して我が骨肉と消化する胃袋の強健さに於て、我々の右に出る民族は世界廣しと雖もそうザラには見出せそうに思われない。

中國の古い語に「換骨奪胎」というのがあるが、これを歴史の上に大きな足跡として実証して見せたのは、他ならぬ吾々大和民族である。換骨奪胎は餘りにも古めかし過ぎるから、例を既成の新品軌に具象して見たものの、問題の要点はあくまで自家の血肉に同化せしめる旺盛な胃袋の能力にあり、こういう達人藝にかけては断じて引けをとらぬのが吾々大和民族なのだ。

民族的優位性と言えば何も戦争の勝利ばかりがその決定的論據ではなかろう。勿論戦勝がその決定に果す役割は否めないとした所で、此の問題も煎じつめれば三つの要素に帰着するのではないか。三つの能力とい

えば……上から云って先ず頭脳の問題であり、次に来るのが例の胃袋だ。そして第三は下って、所謂人的資源の源泉の問題を考えないわけには行かぬだろう。所で吾々大和民族の頭脳と云えば近くはノーベル賞を獲得しているし、ノーベル賞級の偉業は文化のあらゆる分野にザラにあることを自負しているから、頼もしい限りだ。胃袋は……先ほども述べたように日本文化史と云えば頭脳よりも胃袋の画いた歴史と云っても過言ではなさそうだ。人的資源の問題に至っては、これは過ぎたるは及ばざるが如しを地で行く実力発揮に、ひたすら驚嘆の眼を瞠って内心怖れをなしているのは案外吾々日本人自身よりも戦勝の他民族であるらしい。

兎も角も一應三拍子揃っている。戦敗れたりと雖もなおかくの如く旺盛なものである。だから何も民族の前途を危惧するが如き必要など毫もない。それを自称憂國の士が口角泡を飛ばして悲憤慷慨するのは正に杞憂の沙汰に他ならない。日本國では家の天井は間々落ちてくることはあ

っても（そんなことは吾々は案外慣れて平氣なのだが）天がすり落ちて来ることなんか絶対にあり得ないことをちゃんと心得ている。吾々はこのように天の絶対性を確信して居ればこそ、敗戰國の今日でもあの朗かな日章旗を翻飜とひるがえらせている樂天民族なのではあるまいか。日章旗は正に吾々が明き直き心の象徴であり、これはどうして頭腦が胃袋よりも優位にある民族のなし得るわざではあるまい。

アメリカの一女性学究は吾々の民族性を象徴するものとして「菊と刀」にその確証を見出したらしいが、今日所謂インテリと呼ばれる賢明な日本の異邦人達は（彼らは愛國の士ではあっても必ずしも憂國の士ではない。何となれば彼らの頭腦と胃袋とは一般の日本人のように必ずしも倒錯していないから）そういうものには既におさらばしている。然しそうインテリの心頭にも日章旗だけは依然として勇ましい旗風をなびかせているから、やはり大和民族は頼もしいと云わねばなるまい。頼もしいと

云わねばなるまい。頼もしいと云えば一部の日本人が象徴を解して、モウニング服や紋付に威儀を正さねば理解出来ないと井蛙流を固執しているのなども頼もしさを越えて寧ろお目出度い圖であろう。象徴とは必ずしもそんなものではない。日章旗ならずとも前に述べた既製品の軍旗も、彼ら自身のモウニングや紋付も、もとより物として何ものか象徴ならざるはない。例えばアメリカ傳來の中古衣類だって見ようによっては立派な象徴としての意味をもっているのである。嘘だと思ったら近頃百貨店あたりで好評を博しているアメリカ中古衣類の即賣會へ行って、あの景氣のいゝ雰圍氣に暫しひたってみるがいゝ。あれはまるで道化芝居の樂屋さながらだが、皆大真面目になって着たり脱いだり、血眼になって自分に比較的適合するのをあさっている。

あゝいう道化性が吾々の目標とするデモクラシイの線に沿って展開せしめられていなければ幸なるかなであろう。こう觀じてくれればアメリカ

人のお古を無暗に有難がったり、それを着用してふんぞりかえっている 75
新興人種に敬意を表したりすることは、確に最も今日的な象徴としての
意味をもっていることを首肯せざるを得ないだろう。一体舶来のレッテ
ルさえはりつけてあれば下らぬものでも無暗に有難がって、ひけらかさ
ずにはいられないのが日本人の遺傳的悪癖であり、こゝにも頭脳よりも
胃袋の方が優位を確保している民族の悲喜劇が点描されているようだ。
舶来品は薬をおいて無くもがなと云った嗜好は何も国粋主義の立場から
そう云ったのではなくて、その当時として同じであった舶来の悪趣味をこ
っぴどく批判しているのだ。今更こんなことを書くのも他愛ない次第な
のだが、アメリカの一女性學究も折角骨折って探し当てた「菊と刀」が
豈圖らんや、自分らが脱ぎ捨てた中古衣類であったという日本の現実を
知ったなら、開いた口もふさがるがいが、之は又奇々怪々なる現象——
象徴の名に値する現象と云わねばなるまい。

獨立二年目の今日、吾々のデモクラシーも糊と鋏で切ったりはったり、器用な消化作用によって次第に吾々の血肉となりつつあることには間違なしと信じてよかろうが、それでも餘りにも道化た過渡期の種々相が眼に痛い間はまだまだ前途遼遠の感が深い。

それにしても吾々のデモクラシイが他人の製作にかゝるものであるのは歴史的な宿命として諦めねばならないが、せめては彼らの御古着拜用の愚劣さだけは何とか早く脱皮したいものだ。一頃女の子が大人のような聲で切々とうたう「セコハン娘」という歌が流行したが、思いなしかあのメロディにもやはり時代の象徴が何ものかを切實に訴えているようでそゞろ寒けが催されたものだ。

石塔の歌

此の壁々たる沢竜石の下に、生涯漬物をかじり、味噌汁をすゝり、善意をもちながらも土下座して呻吟せねばならなかった人間が鬼哭してゐる。

いつも頭を下げることしか許されなかった人間は母の胎内から既に膝を折った土下座の姿勢をそのまゝに生活した。孔子の教えた鞠躬如という言葉をそのまゝに、鞠のように丸くちぢこまって、権力者の足蹴に甘んじねばならなかった。現世においては食わるべき宿命に生を享け、白らも一個の漬物であり、一椀の味噌汁であり、一塊のこんにゃく玉に過ぎなかった人間にはもとよりゴムまりのような反撥力もなく、山嵐のような反抗の威勢も不可能だ。全く軽蔑されても致し方のない哀れむべき存在として生きねばならなかった。

彼らは生身の幽霊であり、それ故、南無阿弥陀佛の名號を唱える以外に何の救いの可能性も與えられない代物で、死後の浮上に極楽世界を幻

想しながら、現実の汚濁を諦観の暮色で彩らねばならなかった。

彼らに宗教は阿片だとはあたらない。彼らの幻想をそっとしておいてやりたい。沢庵石に封じこめられた世界に果して救いがあるかどうか聞かないがいい。それは苦しむした沢庵石自体が答えている。

あのこけむした墓石は虐げられた人間の宿命を苦悩する夜法石であろうか。しばらく清物の腐臭の充満した墓場から流れてくる立くるしい鬼哭啾々の夜曲に耳を傾けるがいい。燐光の灰かな明滅を伴奏としながら夜毎流れている亡者のハミングを聞いて誰が宿命の課題に戦慄しないのか。此の無秩序な古戦場に如何なる矣の夢の跡がたどれるというのだろうか……

（N）

昌谷詩

李賀作
原田憲雄譯

ねやのおもい

眉引は桂の新葉
緑ふく秋の夜の風
門を出で　わだち去り
鈴の音しやがてとだえぬ
月きよき軒に露おき
かそけしや暁の庭
むなしふしど　ひとりまもりて
つつれさせつゝ聞けとや

新桂如蛾眉
秋風吹小綠
行輪出門去
玉鸞聲斷續
月軒下風露
曉庭自幽澀
誰能事負素
臥聽莎雞泣

（考中思）

蘇小小の墓

蘭の露
涙のごとし
遂げんすべなき契りゆえ
なおたちがたき恋いごころ
草はしとわ
松はかさ
風はもすそ
水はおび
塗籠の車
宵待つに
消えがてに

幽蘭露
如啼眼
無物結同心
烟花不堪身
草如茵
松如蓋
風爲裳
水爲珮
油壁車
夕相待
冷翠燭

冷やきとしびし
西陵は
しぶきふる雨

昌谷の詩

昌谷の五月の稲は
さやさやに水田に満てり
たたなづく遥か山なみ
地におちてかぐろき緑
さしとおる光あまねく
そよ風はかすみを吹けり
たかむらに竹の香はみち

勞光彩

西陵下
風吹雨
（蘇小小墓）

昌谷五月稻
細青滿平水
遥巒相疊疊
頽綠愁墮地
光潔無秋思
涼曠吹浮眉
竹香滿淒寂

琉璃のふー粉ふき出ずれ
なよりふす地の草ぐさに
おく露は涙のごとし
山ほとに樹々かがやけば
徑みな花さきたけぬ
白き蟻やなぎにつどい
高處には松蟬なけり
帶なせる葛の葉黄ばみ
水ぎわに蒲のほ芽ぐみ
錢ごけは寢いむらがり
諸葉みな厚らに茂る
さらされし沙原白く
「青」の字に似て立てる馬

粉節塗生翠
草髮垂恨鬢
光露泣幽淚
層圍烱洞曲
芳徑老紅翠
横蟲鎖古柳
蟬子鳴高邃
大帶委黄葛
紫蒲交狹涘
石錢差復籍
厚葉皆蟠膩
沈沙好平白
立馬印青字

魚くすらがらに遊び
鷗のとりひとつ立つ岸
りょうりょうと淫蛸なきいでて
みなしとの波さわたちぬ

玉眞路うねりつづくに
花むらにひそむ神しき蛾
石みちは水ごけまとい
むらさきに輝く木の實
柏の木　扇をかさね
松肥えてあぶらふきいず
流るるや滿の音のひびき
きらめくや楸の梢
鶯はひな歌うたい

晩鱗自遨遊
瘦鶴瞑單峙
嘹嘹淫蛸聲
咽源鷺濺起
紆綬玉眞路
神蛾蔦花裏
苔紫蒙澗礫
山實垂頭紫
小柏叢重扇
肥松突丹髓
鳴流走響韻
壠秋拒老趨
鶯唱閑女歌

瀑のみすず白ぎぬなせり

風ふけば露みな笑みて
岩ぶすまかたぶきひらき
ささの葉は石嶺にみだれ

水くぐりしら鳥さわぐ
日脚みなかげをぼらいて
新たな雲　空にはなやぎ

夏の光　ここにしずまり
西風ふけばたちまちすぐし

ねむります玉のみかおを
枯たきまつりまおすに
霧の衣　夜にかゝぶり
天降ります夢にねむらん

瀑聚莫続帙
風嘻満冬眠
野叢雜舒墜
亂條逆石嶺
細頸喧島笈
日脚掃昏翳
新雲啓華閔
諡諡厭夏光
商風道清氣
高眠從玉容
燒性祇天九
霧衣夜披拂
眠壇亭眞梓

御幸はち鶯は老い
ふるみやの壁くずれたり
こうろうと鈴うひびけば
わがむねにおこるかなしび
藤のつる扉をとざし
とはりはし魑魅めき古りぬ
あやにしき花さくぎよりかう
いたずらにわやをかざれば
歌やみて梁に塵みち
舞ごろも旗雲なせり
御飼むすぶうすしき里は
てぶりみなあつくただしく
陳りやの忘につゝしみ

待駕樓鶯老
故宮椒壁圮
鴻鵠數鈴響
羈臣發涼思
陰藤束朱鍵
龍懷著魑魅
碧錦帖花檉
香衾事殘貴
歌塵蠹木在
舞綵長雲似
珍壤割綉段
里俗祖風義
都凶不相杵

病むときも邪神まつらず　疾病祭邪祀
老いびとはめぐみかなしみ　鮐皮識仁恵
幼きも恥ずるを知れり　丱角知餽恥
人戮くつかさ用なく　縣省司刑官
みつぎとりおらぶことなし　戸乏詬租吏
竹むらに竹はゆたかに　竹籔添隨蘭
いそべには魚くずみてり　石磯引釣餌
溪ひらけ帶なす流れ　溪灣轉水帶
芭蕉林かたむきしげり　芭蕉傾蜀紙
遠尾根に光さしきて　岑光晃穀襟
人の世のわずらい拂う　孤景拂繁事
酒ありて樽にたきたち　泉樽陶享酒
うたひめの眉引におう　月眉謝郎妓

村の鐘　遠にひびき

聲澄みて鳥か音わたる

夕映えに峯そびえ

岩ほかむ滝の音ちらそい

碧なす淵あかるきに

うす雲は月をかすめぬ

淵に入り光すゞしく

山なかの心ほからや

あまの子ら夜の網うつに

しらとりは羽ばたきしぶき

鏡なす水の面は流れ

うたかたに魚はちぎとう

胴に來て風は瑤琴

丁丁幽鐘遠

橋橋單飛至

霞巘殷嶮峨

危溜聲爭次

淡蟾流平碧

薄月眇陰悴

涼光入淵岸

寂然山中意

漁童下宵網

霜禽球烟翅

潭鏡滑蛟涎

浮球喰魚戯

風胴瑤匣琴

螢はし天馳せ使
つらなれる柳の帶に
篁はゆらぐよゝ笛
石わぐり苔みすみすと
濁り江に蘆の芽青し
空のかけ泉にたわれ
檜の梢　雲をつかめば
月うれうバラのとばりに
むら雲よとげをおゝいね
麥の穂は大田にしげり
畑つもの廣野にみてり
くるしめる成紀の人も
あわれ彼の鴎夷子まなばん

螢星錦帆使
柳綴長縹帶
篁棹短笛吹
石根緣綠蘚
蘆筍抽丹漬
漂旋弄天影
古檜拏雲臂
秋月蔽惜紅
宵雲香曼刺
苦麥平百井
閑乘列千肆
制從成紀人
好學鴎夷子
（昌谷詩）

漢の唐姫　酒をふゝみてうたえる歌

後漢の中平六年(一八九)、董卓、少帝を廢して弘農王となす。明年、山東の義兵大いに起りて卓を討つ。卓すなわち弘農王を閣上におき、郎中令李儒をして酖(毒)を進めしめていわく「この藥を服すれば、もつて惡を免くべし」。王いわく「われに疾なし、これわれを殺さんと欲するのみ」。肯て飲まず。強いてこれを飲ましむ。やむをえずしてすなわち妻の唐姫および宮人と飲燕して別る。酒めぐるとき、王悲歌していわく「天道易し、我れ何ぞ艱めるや。萬乘を棄てゝ退いて藩を守る。逆臣に迫られて命延びず。逝いて將に汝を去つて幽玄に適かん」。よつて唐姫をして舞わしむ。姫、袖をあげて歌つていわく「皇天崩れ后土頹る。身帝となつて命夭摧す。死生路異なれり。これより永きめ。いかんせん我れ煢獨にして、心中哀し」。よつてなみだ下り嗚咽す。坐者みな歔欷す。王、姫にいつていわく、「卿は王者の妃なり。勞いまた吏民の妻とならじ。自愛せよ、これよりとこしえに辭せん」と。遂に藥を飲みて死せり。時に年十八。

つゆじもに御服(おんぞ)ぬれ　御服沾霜露

殿上にあらくさたけぬ
ちりひじに金飾もかくれ
しどけなくくらちりぼう
たかどのに歌ごえやみ
はなぞのを霧へだてたり
雲陽のうてなのうた
なにかせん　むせびなくとも
まかつみの鐵のつるぎ
しばしばも兇威せまり
殘梟　母の心噬み
犇屬　魄をもとむ
あい看てばふたりあい泣き
涙はも波激なしぬ

天衢長蓁棘
金隱秋塵姿
無人爲帶飾
玉堂歌聲寢
芳林煙樹隔
雲陽臺上歌
鬼哭復何益
鐵劍常光光
兇威屢脅逼
殘梟噬母心
犇屬索人魂
相看兩相泣
淚下如波激

「いろすめるこの酒もちて
黄泉に　われはたゆかん」
やまのごと君くすれんは
いわねどもさぶしうたげや
「よしえやし　うつたえのらせ
……天つへは　まがはなしとも……」
魂まつるとばりもなきに
おくつきの木幡あらんや
たえたえに　わが身　日ねもす
しくしくに　きみや　夜すがら
まよびきしおのずとたゆく
白さうなじたれかあわれむ
さよれわれ　きみの妻ぞし

寧用清酒為
欲作黄泉客
不説玉山頽
且無飲中色
勉從天帝許
天上寡沈厄
無處張繐帷
如何望松柏
妾身晝團團
君魂夜寂寂
蛾眉自覺長
頸粉誰憐白
衿持昭陽意

やちまたのひとにむかわじ

洛陽の城外で皇甫湜に別れを告げて

洛陽をたつ私の心に吹きこむは別れの風
龍門のあたりにかすかにたつ煙はきれて
冬の木立はつらそうに寒々とした肌を寄せあい
ひととき華やいだ茜の空も暗い紫に凍りつく
野の彌にたたずむはわが身ひとつ
疲れた馬が枯れなびくあらくさに首をたれて……
君の軒べに立ちよれば　思わず雙の眼より涙
おとしまつるは緑衣の前

不肯看南陌
（漢唐姬飲酒歌）

洛陽吹別風
龍門起斷烟
冬樹東生澀
晩紫凝華天
單身野草上
疲馬飛蓬間
凭軒一雙淚
奉贈緑衣前
（洛陽城外別皇甫湜）

雙岡隨想

—徒然草を motive として—

中　新　敬

痴　性

「髪長ければ智慧短し」と云ったのは、盲目的意志を説く哲學者ショペンハウエルだった。長髪は勿論、婦人の代名詞である。フェミニズムに對して徹底的な嫌惡症に見舞われていた此の哲學者の寸鐵は、婦人の知性によく止めの一撃を加えるに成功しているやに思われる。彼に清少納言を對決させることが出来れば面白かろうに。

出家者の外相が緇衣圓頂を絶對條件と見做すのも、妥するにショペンハウエルの一言に焦點を把え得るだろう。

佛家の説にまつまでもなく、長髪は人間煩惱の象徴であり、これあるがために人間界は迷宮の相貌を呈するのである。こういう常論からすれ

ば、僧形の兼好も此の線からものを言わねばならない筈なのに、彼の筆法はこゝでも例の矛盾をあらわしているようだ。

「女は髪のめでたからんこそ人のめだつべかめれ」とはそもそも出家者にあるまじき口吻ではないか。それならば兼好の心證は一体何處に求め、如何様に解釋したらいゝのだろう。

兼好に於ても緇衣圓頂は勿論、大悟徹底の内證を熟させんためのものであったに相違なかろうが、それにしても彼の人間性の中に相剋する二元に於ては、屢々併道修ゝい宗教人が、鋭敏な藝術家氣質によって打まかされている。徒然草一巻を趣味論とみる見方にも一理はあろうが、それよりも、こういう二元性性の一個人の内心に於ける闘争史として見る方が、彼の人間理解にはより効果ではないだろうか。徒然草は眞俗二諦の相剋になる所産であり、優位はその藝術者氣質によって確保されているという見方も成立つのではないか。

兎も角、敢て平安朝の宮廷文化を憧憬する審美の審美眼をまつまでもなく、今日の我々とても源氏物語や枕草子の繪巻物を見る時、先ず魅惑の眼を奪われるものは、あの宮廷上臈のあざやかな長髪でなくて何であろう。実にあの長髪は日本女性美を代辯するものといっても過言ではあるまい。如何に智慧が充満していても、禿頭では話にならない程比較を絶した美しい代物である。審美が「女は髪のめでたからんこそ人のめだつべかめれ」と書く時、必ずや彼の王朝思慕の眼にはあの上臈達の絲したゝる長髪があやしく物狂おしく映じていたのではないか。

女の長髪は洋の東西を問わず男性を魅惑する慮性の對象であり、欲情のシンボルとして、或は愛でられ、或は呪詛されているのであり、審美の長髪禮賛も彼の俗諦性の根柢が鋭敏な藝術家の感性に立脚していた何よりの証左であろう。

所で今日我々の周囲にいる近代女性の頭髪は然く魅力の對象たり得て

いるだろうか。現代女性の頭髪と云えば例のアメリカ渡来のパーマネント・ウエーブという蓬髪であり、これはもう全國津々浦々にまで風靡している。その流行は勿論時代の要求する生活條件に最も適應性を示すために他ならないだろうが、唯生活の簡易さから簡單に傳統的な長髪の美が抹殺されてしまった感のあるのは、男性の立場からは頗る物足りなくうらわびしさすら感ぜざるを得ない。

軍國主義時代には、それがアメリカ渡来の故を以て敵性視され、「奢の業」と酷評されたらしいが、時代の移り変りはやはり爭われないものとみえる。日本人の直毛にわざ〳〵電氣ゴテをあてゝちぢらせるなど、一種の盆栽趣味で、日野資朝ならずとも、あゝいうものはどうもすさまじい風情であるが、それでも今日ではそれ自体の新しい美を創造しつつあるらしいから奇妙なものだ。美の規範もやはり時代と共に流轉をけみするらしいから、あながち長髪の魅力に恋々たるのも考えねばなるまい。

思えば髪結いのために貴重な時間が空費されるのでは困ったもので、此のテンポの速い世の中で、そんな餘裕もないわけだから今更長髪礼賛をやろうとは思わないが、それにあっいう趣味は何と云っても婦人を男子に隷屬させ、玩弄物視した封建的産物であったという意見も一應は聞かねばなるまいが、(此の点平安宮廷の上臈は才色兼備よく自らの主体性を確保し、寧ろ男性を制壓した感があり頼もしい)見事に結われた丸髷の婦人の歩き振りが、如何にも美髪の重さに耐えかねた一種の日本風蓮歩の賞美された点、お隣りの中國婦人の纏足と同一撒であり、彼の足は我の頭に顚倒されたまゝであってみれば、女代議士の出現した今日女性開放の先鞭として先ず第一になされるのは文字通り由来の陋習たる頭の切り変えでなくてはなるまい。頭髪に奇妙な金具を幾つも結えつけて買物している主婦達に幻滅を感じ観念的には王朝以来の美髪にあこがれても、現実にはパーマを否定するわけにゆかず、うっかり無好の趣味論を振か

さそうものなら、電氣ゴテならずアナクロニズムの烙印を押されそうだ。ショウペンハウエルの言を真とすれば、現代の女性はそれだけ知性において進歩しているはずで結構なことだと言わずばなるまい。思いなしかパーマの美髪にも捨て難い美感があり「蓬生のいぶせさ」は次第に克服されつゝあるようだが、これも吾々男子の審美眼が性欲に歪曲されているための錯覚かも知れない。王朝上臈ならずとも、浮世繪の美人に白痴美を見た近代人の知性にはパーマこそ理性的と賛美を送るかも知れないが、私にはまだどうもあの波立った頭髪はアメリカ渡來よろしくジャズ的狂噪に錯乱した知性のあらわれであり、ニグロの縮れ毛に同調しているアメリカ人のエキゾティシズム以外の何ものでもなさそうに思われてならない。断髪してパーマをかけた女性が知的に進歩しているのなら、兼好ならさしずめ「もし賢女あらば、それも物うとく、すさまじかりなむ」と評するところかもしれない。

それにしても始め私はあの縮れ毛に「雀の巣」どころか陰毛を連想せしめられて、全く物うとく、すさまじい錯倒感を感ぜしめられたものだ。そして時代のアプレ的嗜好は切りかえられたパーマの頭髪に最も露骨にあらわれていると思ったりしたものだ。

たしかにキリストの剃髪が、それによって信者をより一層マソヒスティックに刺戟し、一層信仰心を強固ならしめるのに効果的であったように、アプレ人はあのパーマによってこそ、性的錯倒の陶酔感が倍加されるのであろう。

けれどもともと性欲の虜囚としての人間の本性はたかゞ婦人の髪の長短位いでけりのつく問題ではなさそうだ。女の髪といっても究極は女体そのものゝ問題であるからだ。だから「まことに愛着の道、その根ふかく源をほし。六塵の樂欲みほしといへども、皆厭離しつべし。其の中に、たゞかのまどひのひとつやめがたきのみぞ、老いたるもわかきも、

智あるも愚なるも、かはる所なしとみゆる」と美髪論はそこまで展開されなくてはならなかった。実に色欲煩悩の闇は女の漆黒の美髪にシンボライズされて餘蘊なしと云えよう。兼好は更に語を續けている。

「女の髪すじをよれる綱には大象もよくつながれ!!!」

之は何か佛教説話からの引用らしいが、人間煩悩の淺ましさを云い得て妙である。言葉として私には此の方が前のショウペンハウエルのより面白い。女の髪毛に作った綱なら大象でもつなぎ得るほどに強いというのである。私はそういうもので象をつないだかどうかは知らないが、同じ綱が法城の棟上げに偉力を發揮した事実は知っている。世界一の木造建造物と云われる京都の東本願寺の棟上げには、どんな鎖も皆切れて役に立たなかったそうだ。そこで門徒衆の信女達が黒髪を切断して献納し、それをよって綱にして試みると今度は切れずに流石の巨材も易々と上げられたということである。現にその毛綱は存在して参詣者の信仰心

を刺戟している。るのはキリスト画像の剃髪に似た宗教心理でもあろうか。所で髪を切った信女達は勿論極楽往生疑いなしで目出たい限りだが、救われない有髪の僧尼が法城の屋根の下で有漏有漏とぐろを巻いている。ポマードで頭を光らせながら肉食妻帯、坊主か俗人か見分けもつかず俗に非ずして俗よりも俗臭を放ちつゝ煩悩の虜囚として出家よりも、出寺の必要に迫られているのが彼らの現状ではないか。毛綱の信女達に恥ずべきは彼ら自身であるはずだ。中興の祖蓮如もとんだ「黒髪」礼賛をやったものだと皮肉の一つも言いたくなる所だ。

偖、私の筆もパーマよろしく兼好の尻馬に乗っている中に何が何やら、とんだ変性礼賛をやってしまったらしい。

一体女が髪を切ったからとて、彼女ら自身は勿論男性側としてそれで欲望や煩悩が断滅出来るはずもなかろう。女が皆坊主頭になったとしても男はやはりその坊主頭になったとしても男はやはりその坊主頭に魅力

を感ずることに於て消極的でないことは確かだ。そのことは問題が髪の背後の奥深くにあることを示している。陰毛的パーマは唯そのことを露骨に標示して見せたまでである。

そう云えば女侍というものは昔も今も一種の暗黒大陸のようなものであり、悲しき植民地として分割統治さるべき宿命下にある。植民地といったが、植民地は例外なく何れも鬱蒼たるジャングルをもつことが特色だ。その鬱蒼たる媚態の魔性が知性を痴性にまで叩き直して見せる所に植民地の植民地たる所以があるのだろう。不毛の植民地など失格である。だから女人の宿命は常に植民地的哀愁に彩られている。唐人お吉は唯その尖端の一例であって、何も先驅的範例ではなさそうだ。旧来日本婦人の美徳とあがめられていたその貞操観念だって裏を見れば封建男性の態のいい植民地政策によって訓育された以外の何物でもないという意見がある。

此のことは國家についても云い得る。今や日本は開拓者の下に女体のポーズを取るべく餘儀なくされている。つまりは長髪の植民地國家である。ヴァンデヴェルデが歓迎されるのも、その証據の一つである。それは植民地人のポーズを教えてくれるからである。

じゃじゃ馬訓練では吾々より役者が一枚上の開拓紳士は一應民主々義の習俗儀礼を心得ているかに見えるが、それとて家鴨のいっクムフラアジュに過ぎない。彼らは植民地を軽蔑こそすれ決して崇拝などする道理はないのだ。

唯馬鹿野郎共がヤンキイの馬になって喜んでいる。彼らは独立國家の画餅をむさぼりながら腹ペコ汗だくで貧血の國民を鞭打ち、膏血をしぼりとっている。何という痴態なのだ。これをしも錯倒の痴性と言わねば、一体何に知性の権威が見出されるのだ。

岐路

くすしあつしげ、故法皇（後宇多上皇？）の御前にさぶらひて、供御の参りけるに、「今まゐり侍る供御の色々を、文字も功能も尋ね下されて、そらに申し侍らば、本草を御覧じあはせられ侍れかし。ひとつも申しあやまり侍らじ」と申しける時しも、六條殿内府（久我有房）参り給ひて、「有房ついでに物ならひ侍らん」とて「まづしほといふ文字は、いづれの偏にか侍らん」ととはれたりけるに「土偏に候」と申したりければ、「才のほど既にあらはれにたり。いまはさばかりにて候へ。ゆかしきところなし」と申されけるに、とよみになりて、まかり出でにけり。（第百三十六段）

此の段の話の面白さはいろいろあるであろうが従来は餘りにも通り一

ぺんの教訓談として片付けられ過ぎていた。それというのも前段（第百三十五段）に貧季大納言が具氏宰相中將にやりこめられたのとよく似たケースだと見られ易く、兼好自身もそれからの連想で書いたのだろうと考えられ易いからである。

そしてそこにはあまり自惚れが強すぎると天狗鼻をへし折られるぞという世俗の教訓が兼好一流の面白さで描かれているまでだとされ、「前段同様威張って、しくじった話である。今ならば相當の身分の者が、こんな馬鹿な事は言はないだろうが、そこは單純な古人である。一方が子供のやうな事を言って威張れば、又一方が變な問を出して困らせようとしたといふだけの事。これも別に教訓の意味で書いたものではないが、教訓として見れば十分教訓になる」と云うような批評ですますことになるのだろう。

これは権威ある某注釋書の此の段のモウル把握なのだが、他の類書も

大同小異で、要するに此の段にはさして重要視すべき何物も認めていないというのが注釋書の実状らしい。さてそれでは此の段はそういう単純平板な一場の笑話としてのみ読み過していいものだろうか。

少し變ったところで或る人は當時混乱の世相を反映した言語書では、略字が流行し、言葉そのものが者の雅致を次第に喪って行った一つの例話に引証している。なるほど言葉については兼好も徒然草の他の章段でその荒廃を慨嘆しているから、そういう考えかもなりたつないことはなさそうだ。

けれども私に此の段の話が面白いのはやはり兼好の人間描寫であり、彼の眼光が如何に真実を透視したかにある。敢て中世と云わず、そこには人間の真実が完璧に描かれている。私にはあつしげ笑言の心理的動機がどうも、後醍醐天皇の宸襟を安んじ奉るべく奉答した楠正成の言葉（太平記第三巻）と何処かに語感に一致するものを感じ、その感覚に中世

人間像を摘抉する兼好の近代的知性と彼の俗悪さへの反逆とを感じるからなのである。

正成の言葉というのは有名といえば餘りにも有名である。「正成一人未生て在りと被聞召候はゞ聖運遂可被開と被思召候へ」と云うのである。

正成の話と篤成自負の話と結果を見れば、まるで月とすっぽんであろうが、それにしても二人の中世人の發言の動機には何か一脈相通ずるものを感得するのは私だけなのだろうか。正成が南風不競の折から、孤忠赤心を披瀝し叡慮を安んじ奉ったのは歴史的にも悲愴美の極致として、日本人なら誰しも感動を禁じ得ない所である。一方あっしげの場合はどうであろうか。あっしげとても發言の相手が後宇多上皇であって見れば、仇やおろそかな氣持でかりそめな口が開かれる場所柄ではなく、それを辨えない彼ではなかったろう。何かの行きがかりでそう云ったのを、矯慢と解するのはたまたま同候して来た有房の事前を知らない心事であり、

あつしげの本心とは関らない所であったろうと解するのは不自然であろうか。あつしげは後宇多上皇に對しては曲藁頭ではなかったにせよ、やはりその道のエキスパアトとしての自覺と、その技量に對し御信任を賜わり度い中世人一般の忠誠心から口を開いたまでであろう。

両者を結果的に見れば雲泥の相違があろうが、中世的人間の心理作用としては（臣下の氣持の表白としては）一致点があり、彼らの人間理解には是非そこまで詮索の筆を進めねばならないのではなかろうか。

そして心理的動機に於て両者に軌を一にすることを認めても、その結果に両極的径庭が生ずるところに、人生行路の岐路とでもいうものが宿命的な重さに於て考えられねばならないとするのが私見である。

片や悲劇の主人公として万世その本心に涙をそそがれ、片や喜劇の主人公（古典的道化者）として万世の嘲笑を買う。こういう岐路性、敢てハムレット的岐路とでいわずとも、東洋の叡智は更に古く淮南子説林訓に

は「聖人之偶物也。若以鏡視形。曲得其情。楊子見逵路而哭之。為其可以南。可以北。墨子見練絲而泣之。為其可以黄可以黑。」と道破し、楊墨二家の運命感に悲痛の色彩を添えているのだが、この故事は兼好とても引用するのに抜目のあろう筈とてなく、徒然草第二十六段には「されば、白きいとのそまん事をかなしび、路のちまたのわかれん事をなげく人も有りけんかし。」と人心の頼むに足りぬはかなさを歌い出して、生彩を放っているのだが、等しく中世人の心情吐露の舞場は君主に対する忠誠心の一元に相違なくとも、運命の女神の如何に皮肉なことか。

正成の赤誠には主上に対し一点批判、懐疑のなかった点中世人間像の典型というべく、新時代の開拓者からはその死を楠助の死を以て説かれ、あつしげと同じ嘲笑の対象とされながらも、それにも拘らず彼の悲劇は一種悲劇的であったとも言い得るのではないか。

さて注書によれば、くすしあつしげは「典薬助経成の子、和氣篤成な

るべし。篤成は伏見天皇の永仁中宇佐使を勤む。典薬頭正四位下」とあるからに、その道に於てはやはり第一人者であったに違いあるまい。その道については自他共に許すところであり、何も虚栄をはるまでもあるまいと云えばそれまでだが、医下としての心理現象からなら、奴隷の矜持も認めずばなるまい。侍医が帝王に己の力を誇示したがるのは自慢よりも寧ろ一種の変態的な忠誠心と考えるべきで当り前の話ではなかろうか。そういう立場から侍御についても何か一言なるべからず的責任感から（？）言い出した言葉と解し得る。こういう立場から私はちっぽけの言葉を、単純な自慢だと解する従来の注書の見解は少し酷に失するのではないかと思う。

一方あっぱしげに横槍を入れて美事、満座の中に彼を恥かしめた六條故内府というのは「源（久我）有房。光忠の文。和漢の才人。能書。元應元年薨。六十九」とある。

運命の確立は間々餘りにも皮肉である。此の領分は眞に我がものと信じてはいたものゝあつしげの発言には致命的な粗漏があり。敵は美事にそれをかきつけていた。

「文字も功能も尋ね下されて……」。一寸した一言が図らずも相手の戦場で戦わねばならぬことになってしまった。攻者は和漢の才人能書とある。から始末が悪かろう。心得たとばかり、成算は既に有彦の胸三寸に七首を閃めかせたことだろう。

勿論有彦の教養は、文字や言葉については兼好同様、当代の頽廢に対して痛憤を発する程の復古主義者だったかも知れない。彼の學問的良識の限界内では略字の存在など許すべからざる堕落だったのかも知れない。巧妙にしくまれたワナに、獲物はまんまとかゝった。恐らく塩で釣れる魚であつしげ程の大物は他に類を求め難いだろう。あつしげは有彦の釣バリの塩にかぶりついたのだ。有彦いざあつしげを釣り上げて満座に示

すや電火石火最後の一撃を喰わせている。「いまはさばからにて候へ。ゆかしきところなし」。寸毫の餘裕すら與えない。見事といえば見事だが、隨分エゲツナイ料理振りである。まさかあっしげが塩の本字を知らなかったわけでもあるまい。とっさの場合何倫かという言葉のワナに對して吟味が足りなかったまでだ。有房にしてみれば自分の奸計の弱点を知っておればこその止めの早業ではなかったろうか。私にはどうもそうとしか考えられない。有房と篤成と。此の對決に於てどちらが俗悪か。有房に所謂「教養ある俗物」の一典型を見出すことは不合理といえようか。衆人環視の席で恥をかいすまさは敵を失脚せしめる最も効果的な方策なのだが、そう云えば私には有房の言動に吉良上野介の原型が感ぜられなくもない。

それにしても有房に同調した宮廷人の哄笑の俗悪さはどうだ。そしてこういう哄笑のあふれる宮廷は権謀術数の息づまる修羅場でもある。末

世頽廢の世相と言いし侘、嫉妬、讒謗、奸計、の惡業が立身榮達の入間欲情の迷宮を形成してその中を卍巴にかきまわしていたらしいのは、こういう一例話からも推察するに難くない。私には兼好の出家の動機の一つに俗惡な宮廷生活への厭離感がなかっただろうこと保し難いのである。王朝文化にあこがれた彼も、当時の宮廷社會を見捨てるのに何も未練もなかったのではなかろうか。

生犬の足を切ったと讒言せられ、榮進を停止せられた雅房大納言の場合についても事情は同じだろう。更に楠正成の悲劇的終末すらも、結局君側の奸人の妄言が彼の賢策をはばみ、彼を死地に陷れ、ひいては南朝の命運を自ら縮めたのではなかったろうか。太平記を讀んで如何にも中世人の生活に安定感がなく、累卵の危機を常態としていたかに考え及ばざるを得ないものだ。

そしてそういう時代相と、兼好自身の生活感情の中に萠芽した危機感

が奇妙な文様で美しくも徒然草に開花し結實している。私は兼好文學の本質にはあれかこれか両極に分岐する危機的な岐路性が如何にも巧妙な対照をなしていることを請まずにはいられない。そして兼好自身もそういう時代の宿命的契機を廻避すべく、全身の抵抗が歸結する所は、「紙の衾、麻の衣、一鉢のまうけ、藜のあつもの」に露命をつなぐ草庵隠遁僧の姿に他ならなかったのではなかったろうか。それだけに彼の筆端にほとばしり出た人間矛盾の諸相は鋭く多面観に磨かれざるを得なかったのでもあろう。実に徒然草に於て悲劇と喜劇とは正しく紙一重の問題として把えられ、彼の筆端に躍らされた人間群像の裸形には常に宿命の岐路に苦悩する中世人に普遍する現實感が見事に描破せられている。そしてこういう岐路性の認識こそ兼好解釋の秘鍵であると同時に暗黒な中世の諸相をさぐり出す燈火としての意味をもつものでもあろう。兼好の文學的眼光はそういう現實の二元對立の矛盾相を描くのに特異な霊筆を馳馳

せしめることが出来た。此の段ならずとも、お坊ちゃん的俗物の西園寺内大臣の骨董的静然上人に感じた

「あな、たふとのけしきや」

という詠嘆に対する硬骨漢日野資朝のはき出すような痛烈な一言

「年のよりたるに候」（第百五十二段）

これも有難がり屋の俗物聖海上人の

「あなめでたや、此の獅子のたちよう、いとめづらし。……殊勝の事は御覧じとがめずや、無下なり。……」という思考を獨りよがりが、おとなしく物しりぬべき顔したる神官によって

「その事に候。さがなきわらはべどもの仕りける、奇怪に候ことなり」

（第二百五十六段）と見事にすかされ、虎餅をつく戯画。

その他の章段にもこれに似た類型は穿鑿すれば幾らも見出し得よう。

兼好文學の多面相は屢々人により、科學的と評されるのだが、正しく

科學的な映像把握であろうが、唯その描寫表現の筆は科學の領域を遥かに超えた兼好獨自の靈妙な世界のものとわねばならまい。

兼好の「物狂ほしさ」は、やはり彼の近代的知性や餘りにも自由精神の飛躍が時代に先行していたためとも許し得ようが、少くともその一要因は彼が轉倒の世相に餘りにも岐路性を洞察した點に由來するとも考えざるを得ないものなのだ。彼の近代性は遂にルネッサンス胎動を擧發するようなものではなかった。勿論そういう事新的氣運は胚珠として一種のリビドウの形で彼の腦細胞の下部に蓄積されながら、意識の表面には現れ出なかったらしいが、それは何ら彼の罪ではなく、又彼の権威を失墜せしめるものでもあるまい。それほどにも中世的暗黒は暗過ぎたのであり、彼の燈火的役割は直ぐには新しい人間解放にまでは実現を見なかったものと解すべきである。

けれども彼の科學性、近代性、自由精神は明らかに今日のものであり

両面描写で実体の量感のみならず、その眞実相を餘蘊なく描き得た真な
ど、近代絵画の手法は既にわが中世期に一草庵隠遁僧の「物狂ほしい」
一管の筆者によって遺憾なく成功していたと言って過言でないことを信
ずるものだ。

系譜

「達人の人を見る眼は、すこしも誤る處あるべからず。」兼好の人間を凝
視する炯眼もさることながら、私にはその人間の行動性を規定する背景
としての宿命的な環境―当時の時代や文明の描写に對しても陰微の間に
伴奏の妙機が見事に打込まれて寸毫のゆるぎもなくその人間描写をして
いよいよ光彩あらしめあの名文を完璧ならしめているように思う。そ
してこれは唯副次的な點景というには餘りにも大きな意味をもっている

ので、何れを主とし何れを従とすべきか決し難い場合すらある。

此の點に私はしばしば兼好の犀利な文明批評的性格を見出したく思うものだが、それは彼の生きた時代が鎌倉末期から南北朝へかけて、史上空前の過渡的渦巻があらゆる二元對立の矛盾をはらんだたくましい相剋のすがたを呈し、狂瀾怒濤のすさまじさをほしいままにした時代だったから、一隨筆者とは云い條、このような時代の陰影は筆者が希有なセラリストであっただけ他の如何なる類書も企図し及ばなかった独自の才筆を以て活寫されているように考える。

對立する二元の相剋図。これは彼の時代の特徴であり、且又宿命であった。彼の言説自体が矛盾悖戻そのものであるかのように見られる一因も確に此の点にかゝっていることが多い。

その中政治的權力の盛衰隆退は勿論のことながら、兼好自身一個出家者の身であってみれば、その透徹せる観察眼の向う所は先ず第一に彼と

同類の繽流社会の人間像の摘抉にあったのも亦当然の帰趨と云わねばならぬ。

当時の宗教社會。此の相剋する様相を図式化すれば、それは天台眞言や奈良佛教の傳統的権勢を誇った諸宗が、徒らに形式を整え形骸の末にとらわれ、漸くその本来の宗教的生命を凋落せしめ、その擬襲をかゝげた家主濟度は有名無実化し徒らに時勢の矛盾に拍車をかけた挙句はいわゆる末法思想が瀰漫し、民衆の苦悩をよそに権力の縄張り争いを激化し、てしまった。そういう霊魂の間に對して、当然の要請として生れ出でた禪宗、日蓮宗、浄土門諸宗は獨特の簡易直截な方法により、信仰の依憑を失った民衆に生活力を充実補填したのであり、それら新興佛教は目も鮮かなエランビタールの火花を散らすことになったのである。こういう二元對立の様相はあらゆる文明の分野で深刻に現われ、正しく当代時代精神の象徴であると云い得るのである。

八歳にして佛を質し、神宮の文を瞠若たらしめた程の麒麟兒であって、宮廷に進出しては北面の武士として至尊に忠尽し、特に和歌の才によって深甚の眷顧を被ったけれども、事に感じて此の榮達の世俗道を厭離し、緇衣円頂の出家者の境涯に悠々自適の餘生を送らんことを願ったという。そして僧侶としては叡山に登り天台の教學を究めた所に一應彼の立場が考えられるのだが、こういう彼の人間性発展の系譜を形式的に辿ると、彼の立脚地は一應傳統の聖道門佛教にあったと目せざるをえない。だがそれはさておき徒然草一巻を虚心に通讀して、そこに活寫されている僧侶の人間像を新旧宗門の範疇に分類してみる時、私にはどうも彼が聖道門格勢の諸宗に身を托して晏如としてはいられず、信仰として自ら熱烈に欣求したのはやはり新興の浄土門（特に法然門流）の方にあったのではないかと考えざるを得ぬ。

彼は卷頭、人間欲望の対象批判の中で、法師論の序説とでも云えるものをかゝげている。「法師ばかりうらやましからぬものはあらじ、『人には木のはしのやうに思はるゝよ』と清少納言がかけるも、げにさることぞかし。いきほひまうにのゝしりたるにつけて、いみじとはみえず。増賀ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、佛の御をしへにたがふらんとぞおぼゆる。ひたぶるの世すて人は、なかなかあらまほしきかたもありなん」と出家者の身ながら獨異の自己否定的口吻をもらしている。否定すると共に肯定することも忘れない彼の筆法は屢々生半可な「錯乱の論理」としてしばしば冷笑を買うのだが、私はこゝにこそ彼の批評眼の鋭い閃きを感ずるものであり、此の段を唯人間の頽わしかるべき欲望の分析批判とのみ讀む見解には当時の聖道旧宗門に對する新興佛教諸宗の対立という文明現象の理解がなくては、文段を追うて逐次展開されてゆく徒然草の活舞台のからくりは讀者にとんでもない誤解を犯させかねないこ

とを憂えるものだ。

ひとしく佛教というもの、傳統的權威をほこる聖道門と新興氣鋭の禪宗や浄土宗とでは外相的條件の規定する人間像に大きな差異が現われるのは必然であり、兼好の人間（僧俗）描寫の興味の焦点もこゝの所を決して等閑に附してはいないように考えられる。清少納言の言葉を引用しながらも兼好は彼獨自の法師論を披瀝しているのであり「ひたぶるの世捨人」という時代の産物に對しては思慕の情を吐露している所を見ても解釋上一種の暗示があるようだ。

兼好は傳統の聖道門系僧侶の型を否定してほのかながら新興の浄土門僧侶―特にその草庵裏の生活者に思慕の眼差しをつゝましやかに見はっている。兼好と云えば何が何でも王朝文化の尚古主義者のようにしか考えられない公式的注釈者には、真実生活に於ては寧ろ専心念佛者の方を望んでいたことを一考してもらいたいものだ。こうは云うものゝ彼の云

うものゝ彼の云う「ひたぶるの世捨人」が必ずしも浄土門的範疇を以て律し得るものとは私も考えていない。然し混乱の世相にあって、名利を求めて「いきほいまうにのゝしり、仏の御をしへに違うた」のは正に聖道門系の僧侶―殊に政治的権力を背景とした南都北嶺や高野の僧侶等であり、特に入道と称する奇怪な化物であった。そして「ひたぶるの世捨人」がそういう悪な堕地獄僧へ破門の絶縁状を叩きつけた反逆者であったことには間違いないと考えたい。

彼らの信仰生活には象生濃度の大乗性は見られないかも知れないし、又彼らは自分一個の主体性を守って小さな小乗の殻内に身をとじこめた独善主義者として批判もされよう。此の草庵者も亦悲しき一種の中毒だったろう。だが当時の世相に於て大乗小乗の形式的教判論など多くは議論倒れで宗教としてはそもそも末の末の問題。それ自身既に宗教的生命の涸渇した一つの顕著な末法的現象であったと解したい。草庵への逃

避者が如何に小乗的獨善者の毀りをうけようとも、彼らこそ眞實の法燈を胸奥に燃しつづけた純粋な宗教者であり、まさに消えんとする佛教の本質的命脈の傳達者であったと見る考え方に私は賛する者だ。

現に引例されている増賀ひじりについて注釈家は次のように傳えているではないか。「天台座主慈慧に從ひて台學を修め、後名利を厭ひて大和多武峰に隱れ、行道四十一年。奇行多し。長保五年寂、八十七」

増賀ひじりは何し浄土門への帰依者であったかどうかは別として、身を以て佛教の形式的墮落に反逆した一種レジスタンスの実践者であったことには間違いなく、彼の物狂いはその反逆精神の端的な表白であり、決して退嬰的な独善主義者でも韜晦的な佯狂でもなかったろう。俗悪な妥協精神の量的権威に対して自らの空拳の虚しさを知った者なればこその「奇行多し」であったろう。宗教や藝術の世界の奇行家には、そういう傳統的権力に対する反逆心から激発された者が多く、彼らの奇矯な行

為はそれ自体が心血をしたゝらして文明批評を書くことに他ならず、従然草の中にも第六十段の盛親僧都などもやはりそういう人物ではなかろうか。今昔物語や宇治拾遺を読んで感ずるのは増賀ひじりとてやはり同じ時代精神の産物であったろうということである。

それにしても此の一小節の法師論が冒頭に打出されているということは私にとゝて大きな意味があるようだ。そこに私は徒然草全篇の隠約を流れる兼好の文明批評家的性格の根柢を見出して兼好の人間理解の秘鍵を考え得るからである。宗教界の二元相克を没却して徒然草の人間理解はその完璧を期すべくもない。特に人間の他面描写は兼好文学の追随を許さぬ絶対境であり、筆のしたゝりはその涙泉をこゝにまで求めざるを得ないことを確信する故、私は徒然草解釈はいつも此の立場に立って考えることを怠らないつもりである。

例えば第八十六段である。短いから全文を引用しよう。

惟継中納言は、風月の主にとある人なり。一生精進にて、讀経うちして、寺法師の園伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺やかれし時、坊主にあひて「御坊をばてら法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりはほふしとこそ申さめ」といはれけり。いみじき秀句なりけり。

此の文段に対する従来の注解は私には餘りにも字面のレトリックにとらわれているとしか思われない。寺を焼かれたから寺法師から寺を抹削して法師とのみ呼ぼう。これでは洒落は洒落でも餘りに単純にすぎる嫌いはなかろうか。「寺」のもっていた時代性が餘りにも無視され過ぎてはいないだろうか。こんな単純さにサラリとした洒脱味を味わうことができるといえばそれまでの話だが、私には唯それだけの話ならあれほど文学センスの鋭敏な兼好がわざわざ「いみじき秀句なりけり」と思わず笑を叩かんばかりに最大級の賛辞を捧げる筆はないように思われる。さればと云って法師を「火鳳し」の懸詞とするのもやはりこいつけのレト

リックであり、風月の才にとむ一生精進者の心事としては少しく俗臭に失している。兼好の真意は寧ろこういう俗臭さへの反撥から書かれたものだと解したい。

「一生精進」――これは兼好にとっても望ましい生活であったに相違ない。惟継は寺門緇流一般のように権勢を笠に着て「名聞ぐるしくいきほひもうにのゝしる」ような人間ではなく、求道一途の真の佛教者なのだ。ここにはもう聖道も浄土もそんな派閥的対立感はない。唯明鏡止水の心境におかれているありがたい佛教者の修行生活があるばかりだ。

当時寺門が山門と勢力の張り合いからとかくの軋轢があり、互に相手の権勢を殺がんため武力を行使したことは歴史の傳える所である。此ふためも両者とも放逸無慚なやくざ坊主の養成に寧日なき有様で、寺とは云うものゝ俗悪極まりない地獄相の牙城であったろう。だから寺法師とは音に聞えたやくざ渡世の破戒僧の集団の観を呈していたことだろう。寺

法師の中で心ある真實求道の僧侶たちは自ら寺法師と呼ばれることに一脈の暗影を感じ忸怩たるものを感ぜざるを得なかった。彼は真に泥中に咲き出た白蓮華一輪にも比すべき存在であり、圓伊僧正も恐らくそういう白蓮社中の一人であり、此の真惟継とも親しい語らいの仲だったろう。時あたかも文保三年四月三井寺は例の縄張りの争いから焼き打ちを食って寺は焼かれてしまった。惟継にとってはこのことは別に困ったことではない。内心寧ろ慶賀にたえないものがあったと解する方が真に近い。だからこそ圓伊に対する挨拶があの秀句となって迸ったのだ。もう厭わしい寺はなくなった。これからはキレイサッパリ法師とのみ呼ばしてもらう。その呼び方の方があなたにふさわしい、というのである。名実悖戻の醜態を矛盾を呈していた寺門衆徒に対する辛辣な痛撃の一針とはこういう語をいうのであり、兼好が「いみじき秀句なりけり」と詠嘆したのも尤もである。

兼好はこういう二人の閑柄を好ましく微笑んで見ている。こゝでの彼の笑いには例に似ず逆説の機鋒が微塵もない。素直にほゝえんでいる。俗悪な権勢の法衣をさらりとぬぎ去って、迷妄の塵を拂うことのできた正に「光風霽月」の心境に同感すればこそ兼好も思わず「いみじ……」と詠嘆したのである。兼好は惟継に同感した。丁度それと同じ心理的契機によって第六十段の盛親僧都も活写したのであり、あれほどの霊妙な筆致を活動させて佛教者の眞実生活のありかたを完璧に描き上げたのだ。これは断じて、随筆のジャンルに考えられ易い偶然の筆のすさびではありえないのである。

次に第百六段の證空上人に筆を進めよう。これは「高野」とあるからには傳統的権勢を誇る密教の霊場であり、女人禁制のための悲劇石童丸の話なら誰でも知っている。それを博引傍證の注釋家は大抵次のように唯名前の同一をのみ着眼して引例する。「高野の證空上人。傳不明。但し

同名の僧、法然の弟子、三井寺の智興の弟子にはあり」。古來坊主の名前と石塔に記された法名には同一のものが多い。私は注者のこういう扱い方には同意したくないものだ。

此の注では、本文の高野が等閑に附され、證空の名前があれこれ傍証されているのはいゝが、片や三井寺の智興の弟子、片や法然の弟子と並列のまゝ放置されているのは、注者の佛教系譜に対する無関心を告白しているようなもので、私としては同意しがたいのである。

こういったからとて、前述の如く、私とても聖道門、浄土門の系譜を振りかざしてのみ複雑性奇な人間性が理解できようとは思わない。現に三井寺にだって兼好の眼鏡に適う圓伊のような人物もいれば、法然の弟子に晝寢ばかりする生臭坊主がうようよいたことにも間違いあるまい。だがこの段の證空があくまで高野の證空であって、智興の弟子でも法然の弟子でもないことを位は直感したいものだ。

従來の注解では「證空上人の態度は、どう考へても褒むべきところはないが、これが当時教學方面などで高名な僧であったため、兼好はあたまからこれを尊敬してをり、従って、その專門家的世間知らずの態度が氣に入って、この話に好意を持てたのであらう。」と書いている。「よき人」に對して頭から尊敬する中世人的態度は兼好にも備わっているけれど、此の證空に対しては当らない。寧ろ価値は逆である。

先に述べたように高野の證空上人はあくまで高野の證空上人であって餘人ではない。教學方面で高名な僧かどうかも分らない。但彼の口吻を考えるとたしかに教相方面の學僧らしく、それもコチコチの形式論者で、その知性には活作略の禅機など藥にしたくもないようだ。あるものは弾力性を失った精神的動脈硬化症患者に見られる公式主義でしかない。下手に法律を學んだ人々にはよくこういう型が見られるが、證空も形骸的傳統を守るにキニウ〳〵たる學者らしく傳統的權威の下に宗教者として

の生氣を搾取されつくした植物標本をほうふつさせる人間ではないか。彼の口吻は何か排他的独善的教判論をいじくり廻すことで一生を棒にふった愚鈍者よろしくの間抜けさが減が兼好の眼に滑稽に映じたのであり、兼好ならずとも、明らかにこれは漫画のモティーフである。

諧空には位階や序列等の安っぽい名利がいつも関心の重点であり、自分で自分の首をしめながら、他人にも耐え難い雰囲氣を押しつけながら生活する官僚によく見られる俗物の標本である。大将や大臣になる為には戦争でもやりかねない手合いとその動向に於て軌を一にしたものが感じられる。我が佛のみ尊く、他宗を非議譏謗することゝ至らざるなき宗教的俗論は相手が女人だろうが、馬方だろうが手ごゝろなどの心のゆとりはない。世間知らずで無邪氣と云えば一應そうも考えられなくはないが、人物器量の程度は見えすいている。とても和光同塵などのモラル価値など理解できる柄ではなく、せめても吹けば飛ぶような子供っぽさが

取柄である。

私には兼好がこんな鑄物のような人間の言動に心底から感激してったふとかりけるいさかいなるべし」等の賛辞を送ろう筈がないように思われる。これを素直に受けるのと、そういう俗悪への反逆として諷刺と取るのと価値は正しく百八十度のコペルニクス転換にある。これに逆説が讃めないような人々は日野資朝から毛のはげ落ちた病犬をプレゼントされるにふさわしい人だろう。また聖海上人の有難涙に同調した同伴のお目出度族の一員でもある筈だ。兼好の知性は涙や笑いをモラルの試験管に入れて分析する科學者のそれであり、文明批評家のものであって、諧空の滑稽をすがたを有難がるようなありかたがりやではない。

諧空と聖海と。偶然なら空と涙との有難い対照は何れも当時の末法的時代相が生んだお目出たい俗物の標本である。

法衣は俗悪な欲情をカムフラージュする方便に過ぎず、南都北嶺は云

うに及ばず、高野も御室も生臭坊主の巣窟であった時代相に対する文明批判は、当然このように皮肉であり辛辣にならざるを得なかったことを考える。別にまた従然等に奇妙な姿態で登場する入道なる種族の人間性分析に於てもやはり同じ相関の因果的系譜が考えられていゝのではあるまいか。

兎も角も宗教者としての兼好自身の系譜がどんな座標に決定されているかを考える場合、彼の文明批評家としての性格を度外視することを許されないだろう。

話が少し理窟っぽくなりすぎた。再び高野の證空上人にまで戻って兼好の霊妨な運筆の跡を味わって見たい。

高野の證空上人が泥まみれになりながら、喰ってかゝった当の相手は馬上の女性であり、彼の従者的立場にある口とりの男であった。兼好はその女性については何らその姿態容貌を描き出していない。さすがに兼

好である。大抵の作家なら女性描寫に腐心する所を、馬上の女性には一言半句も費していないのは寡好ならでは出來ぬ至藝である。此の文章の主役者は実は譚堂ではなく、寧ろ陰の存在である「馬上の女性」である。これが分らねば此の文章の妙味は味わえない。自ら相当な地位を矜持して来た譚堂が、わめけばわめくほどいよいよ軽く、浮いたものになって行くのは彼の「檜の僧正」の作為の結果とよく似ている。これでは全く清女の筆をまつまでもなく「人には木のはしのやうに思はるゝよ」を地ではゆくことになり、平素の自重自信はめちゃくちゃである。如何にも女人禁制の霊山から天下って来たドン、キホーテといった圖ではないか。泥にまみれてわめく上人を馬上の女性は如何に眺めていたか……上人はどう欲目に見ても正しくかなしむべきドン、キホーテの日本版である。

聖道門系の世間知らずの学僧らしい面目が彼の言動に溢れている。硬化して融通の効かない知性の滑稽さは落馬の姿勢を想像すると躍如たる

しものがある。金好という男も随分と落馬の姿態を描くの好きらしい。落馬者は誰の眼からも滑稽だからだ。そして落馬者自身は餘りにも痛ましい。だから落馬は悲喜劇二元の機縁をふくんでいる。金好が興味をもつのも偶然ではあるまい。徒然草の喜劇は全てこれ落馬の相の委細な演出といっても過言ではない。そしてこれは最も見事な例として捉えられているのだ。それにしても馬上の女性は曲物である。悠然と馬を乘りこなせうる凄腕をもっている。

謹空の狂態は女性の無作為によって、ますます生彩を放って活寫されている。老子の所謂「無為にして為さざるなし」とはこういう女性をいうのであろう。そしてこれはドーデーの「アルルの女」と同じ筆法なのだ。

「けしからん女だ……」と日頃きたえた教判口調よろしく満腔の怒氣を叩きつけては見たものの、相手が一枚上の役者では刃が立たない。そして

又口とりの男も三枚目として振っている。

詮空自身こういう茶番劇に自分の役割の出る幕でないことを感じたればこそ尻からげて逃げ出さざるを得なかったのだ。「きはまりなき放言しつと思いける氣色にて」とあるが、何も伊教者として自分の言動を恥じたのではあるまい。此の場合此の上人にそんな心のゆとりがあったら芝居は別な幕を展開している筈である。

女人禁制の霊場に育っただけあって、餘りにも女性を知らず、敬性の認識を欠いている上人の態度はおかしくも又あわれである。女性の眞空圏にあって、自分では絶対視して来た秩序が眼前反古同様に投げ捨てられるのを感じ、上人の逃げ足の下でさぞ聖道門系譜の大地が鳴動していたことだろう。

上人はどのアングルから見ても風車に突撃したドン・キホーテだ。馬上の女性は鎖鎌の達人ともいえよう。彼女の指頭に獨楽の如くリュウ〳〵

風を切って振り廻されている分銅は即ち諧空自身の人間性に他ならない。諧空の心理が遠心的にしか働かないのも所以なしとはすまい。兼好はこういう遠心的無主体性を第九十七段で「僧に法あり」とも唱破している。

どうくどいようだが、私には徒然草の舞台に活寫されている僧侶がどういう系譜に屬する佛教者かということを吟味することなしには文明批評家兼好の物狂ほしい執筆の心理的動機付けは理解出来ないように思われる。彼の生きた時代の宿命的二元性は如何に隱遁者の筆のすさびにとて物狂いの陰影を濃厚に投映させずにはすまさせないのである。こゝに文學の座標が決定される。從來徒然草の座標の解析が餘りにも風土的人間性の一元に於てのみ把えられ過ぎているうらみに対して些さか偏見を吐露してみた。私の小文は結局、文明批評家兼好に対しておこがましくも警鐘的役割を果さんとするものに過ぎない。

私も從來先賢のものされた業績の数々にはいつも啓發されながらも、

その土壌の中に、無躾ながら、もの狂ほしい反逆の血潮をたぎらせざるを得ないのである。かの泥田の水面に地蔵尊を流ったという久我内大臣道基ではないが「隨身のふるまひは兵杖の家が知ることにて候ふ」とのみ切言する心事を念願するものだ。

けれどもここで「眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて殊に先をおゝべき理あり。」という注釋家的口吻はそもそも、兼好は何を言わんと欲しているのだろう。

そもそも「眷屬の惡鬼惡神」とは―。兼好も亦現代に於ては眷屬の惡鬼惡神に圍繞せられてかつぎ廻され、殆んど窒息せんとしているのである。

未熟な小誌第一號に對し先進諸賢より懇篤な激勵批評を賜りましたことを深謝致します。第二號の發行が大層遅れましたが、次號は十二月下旬までには出し、以後、季刊としたいと考えております。

方向　第二號　非賣品

昭和二十八年九月二十五日發行

編集發行人　中新　敬

京都市西陣局區内下長者町通千本西入　妙德寺内

方向社